

平成元年度(第25次)高校教師海外研修  
報告書

平成元年12月

国際協力事業団

広 報

J R

89-7



JICA LIBRARY



1085835(5)

21639



平成元年度(第25次)高校教師海外研修  
報告書

平成元年12月

国際協力事業団

国際協力事業団

21639

## 序 文

国際協力事業団（JICA）では、国際協力に関する啓発事業の一環として、次代を担う高校生の国際理解教育の現場で、研究・実践されている全国高等学校国際研究協議会加盟校の先生方を対象として、昭和40年より海外研修派遣を行ってまいりました。

本年度においては、南米に5名、タイ、マレーシアにそれぞれ14名、合計33名の先生方に参加していただき、わが国の国際協力の現状や海外で活躍している日本人、あるいは訪問国の経済、社会、教育事情等を視察し、理解を深めていただきました。

ここに、参加者の研修報告を取りまとめましたので、関係各位のご高覧に供します。

平成元年12月

国際協力事業団

総務部長 杉野 明





# 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| 1. 参加者氏名 .....   | 1  |
| 2. 報 告 .....     |    |
| (1) 南米班 日程 ..... | 4  |
| 宮城県立米山高等学校       |    |
| 高 橋 敏 明 .....    | 6  |
| 秋田県立金足農業高等学校     |    |
| 石 亀 捷 康 .....    | 15 |
| 神奈川県立保土ヶ谷高等学校    |    |
| 臼 井 良 雄 .....    | 17 |
| 山梨県立峡北農業高等学校     |    |
| 中 島 勝 人 .....    | 20 |
| 岐阜県立土岐北高等学校      |    |
| 小 串 泉 .....      | 23 |
| (2) タイ班 日程 ..... | 26 |
| 山形県立上山農業高等学校     |    |
| 深 瀬 教 夫 .....    | 27 |
| 福島県立福島農蚕高等学校     |    |
| 佐 川 芳 雄 .....    | 29 |
| 群馬県立利根農林高等学校     |    |
| 佐 藤 一 彦 .....    | 34 |
| 富山県立富山西高等学校      |    |
| 高 谷 純 夫 .....    | 39 |
| 三重県立津高等学校        |    |
| 出 丸 久 之 .....    | 42 |
| 京都府立農芸高等学校       |    |
| 須 藤 武 彦 .....    | 47 |
| 兵庫県立神戸甲北高等学校     |    |
| 柴 田 和 三 .....    | 49 |

|                     |    |
|---------------------|----|
| 岡山県立高松農業高等学校        |    |
| 小林 秀之 .....         | 54 |
| 愛媛県立内子高等学校          |    |
| 山城 俊一 .....         | 57 |
| 福岡県八女農業高等学校         |    |
| 待鳥 順二 .....         | 59 |
| 熊本県立玉名農業高等学校        |    |
| 鎌浦 誠一 .....         | 62 |
| 宮崎県立都城商業高等学校        |    |
| 奥 正弘 .....          | 67 |
| 鹿児島県立鹿屋農業高等学校       |    |
| 永田 良文 .....         | 69 |
| （高国協事務局）東京都立武蔵丘高等学校 |    |
| 永井 實 .....          | 72 |
| <br>                |    |
| (3) マレーシア班 日程 ..... | 75 |
| 青森県立八戸北高等学校         |    |
| 工藤 康暢 .....         | 76 |
| 栃木県立真岡農業高等学校        |    |
| 増淵 夫美康 .....        | 79 |
| 埼玉県立熊谷農業高等学校        |    |
| 新井 敏夫 .....         | 81 |
| 千葉県立船橋二和高等学校        |    |
| 足立 欣一 .....         | 83 |
| 石川県立七尾高等学校          |    |
| 高崎 義一 .....         | 85 |
| 名古屋市立名東高等学校         |    |
| 高橋 史雄 .....         | 88 |
| 滋賀県立東大津高等学校         |    |
| 田中 恵次 .....         | 93 |
| 大阪府立東豊中高等学校         |    |
| 井上 喜久造 .....        | 98 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 鳥取県立境高等学校     |     |
| 浦 木 勇 .....   | 100 |
| 広島県立西条農業高等学校  |     |
| 橋 本 英 治 ..... | 103 |
| 徳島県立三好農林高等学校  |     |
| 山 本 一 夫 ..... | 106 |
| 香川県立高松第一高等学校  |     |
| 中 嶋 貞 夫 ..... | 109 |
| 高知県立高知南高等学校   |     |
| 岡 本 美喜男 ..... | 112 |
| 大分県立山香農業高等学校  |     |
| 山 本 浩 一 ..... | 114 |





OCEANO PACIFICO

CILE

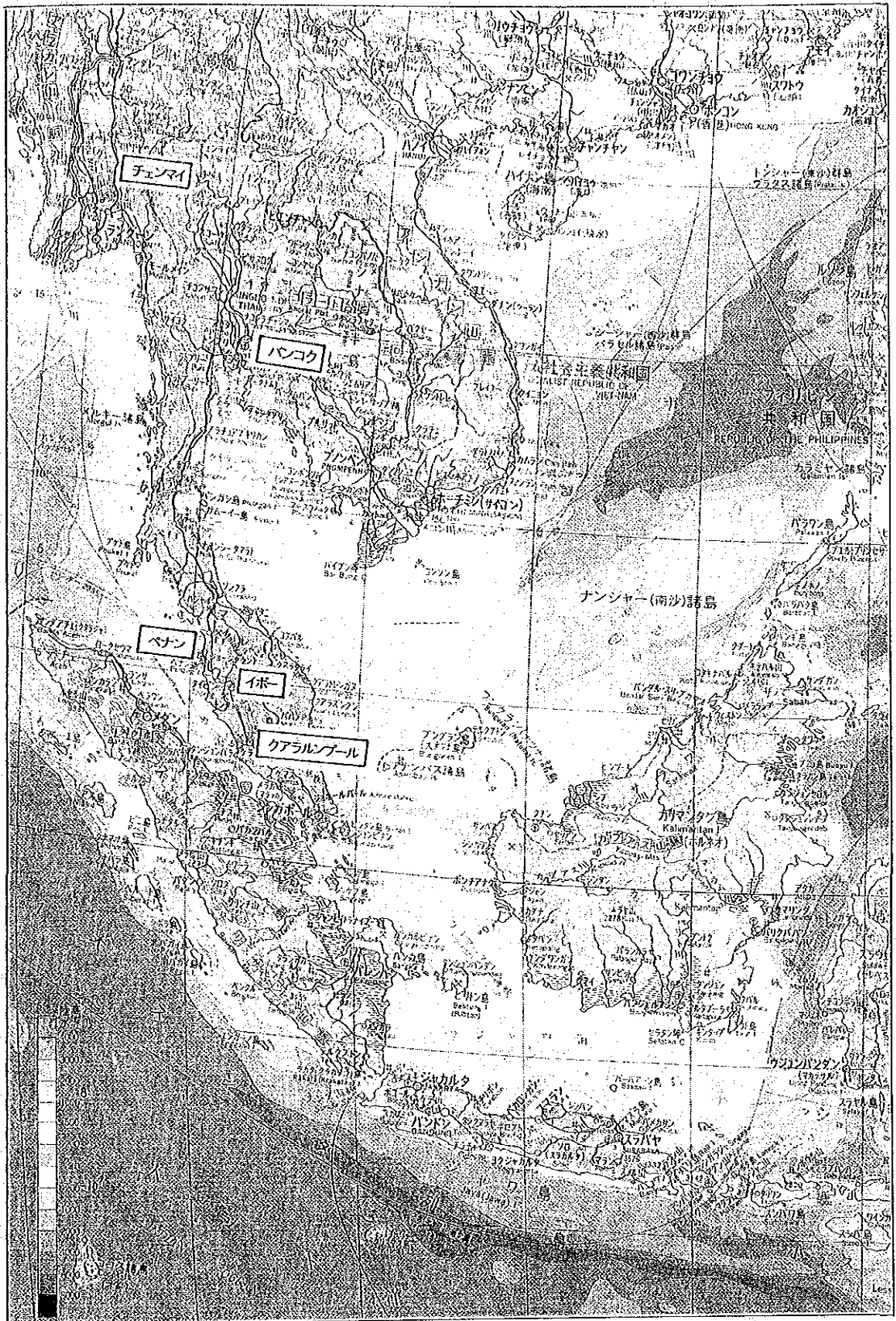
20°

30°

50° 60° 70°

30°









1. 参加者氏名

<南米班> (ブラジル・パラグアイ)

|   | 氏名      | 年齢<br>生年月日      | 所属学校                                 | 担当教科 |
|---|---------|-----------------|--------------------------------------|------|
| 1 | 篤 嵩 敏 明 | 40<br>23. 8. 31 | 宮城県立米山高等学校<br>宮城県登米郡米山町中津山字筒場埠237    | 農業   |
| 2 | 以 石 健 康 | 47<br>17. 3. 12 | 秋田県立金足農業高等学校<br>秋田市金足追分字海老穴151-1     | 農業   |
| 3 | 白 井 良 雄 | 49<br>15. 1. 2  | 神奈川県立保土ヶ谷高等学校<br>神奈川県横浜市保土ヶ谷区川島町1557 | 英語   |
| 4 | 中 島 勝 人 | 33<br>31. 5. 27 | 山梨県立岐北農業高等学校<br>山梨県北巨摩郡長坂町渋沢1007-19  | 果樹   |
| 5 | 小 串 泉   | 47<br>17. 2. 25 | 岐阜県立土岐北高等学校<br>岐阜県土岐市泉町河合根の上1127-8   | 商業   |

<タイ班>

|   | 氏名      | 年齢<br>生年月日      | 所属学校                                  | 担当教科 |
|---|---------|-----------------|---------------------------------------|------|
| 1 | 津 瀬 教 夫 | 49<br>15. 6. 29 | 山形県立上山農業高等学校<br>山形県上市市弁天2-15-1        | 農業   |
| 2 | 佐 川 芳 雄 | 59<br>5. 2. 14  | 福島県立福島農蚕高等学校<br>福島市永井川字北原田1           | 校長   |
| 3 | 佐 藤 一 彦 | 45<br>19. 4. 24 | 群馬県立利根農林高等学校<br>群馬県沼田市栄町165-2         | 農業経営 |
| 4 | 篤 谷 純 夫 | 41<br>26. 6. 24 | 富山県立富山西高等学校<br>富山県婦負郡中町速星926          | 社会   |
| 5 | 出 丸 久 之 | 45<br>18. 7. 7  | 三重県立津高等学校<br>三重県津市新町3-1-1             | 英語   |
| 6 | 須 藤 武 彦 | 33<br>30. 8. 6  | 京都府立農芸高等学校<br>京都府船井郡園部町南大谷            | 農業   |
| 7 | 栗 田 和 三 | 39<br>24. 9. 14 | 兵庫県立神戸甲北高等学校<br>兵庫県神戸市北区山田町小部字大脇山13-8 | 英語   |

|    | 氏名            | 年齢<br>生年月日      | 所属学校   | 担当教科 |
|----|---------------|-----------------|--|------|
| 8  | 小林 秀之         | 35<br>28. 9. 6  | 岡山県立高松農業高等学校<br>岡山市高松原古才336-2                | 農業   |
| 9  | 山城 俊一         | 40<br>23. 9. 26 | 愛媛県立内子高等学校<br>愛媛県喜多郡内子町大字内子甲1855-1           | 社会   |
| 10 | 待鳥 順二         | 33<br>30. 4. 8  | 福岡県八女農業高等学校<br>福岡県八女市大字本町2-160               | 農業   |
| 11 | 鎌浦 誠一         | 41<br>23. 4. 17 | 熊本県立玉名農業高等学校<br>熊本県玉名市立願寺247                 | 農業   |
| 12 | 奥 正弘          | 44<br>19. 11. 1 | 宮崎県立都城商業高等学校<br>宮崎県都城市上東町31街区25              | 社会   |
| 13 | 永田 良文         | 44<br>20. 3. 2  | 鹿児島県立鹿屋農業高等学校<br>鹿児島県鹿屋市寿2-17-5              | 農業   |
| 14 | 永井 實          | 57<br>7. 5. 18  | (高国協事務局)<br>東京都立武蔵丘高等学校<br>東京都中野区上鷲宮2-14-1   | 教頭   |
| 同行 | 木下 建<br>山田 毅久 |                 | 国際協力事業団総務部広報課課長代理<br>国際協力事業団移住事業部<br>移住計画調査課 |      |

<マレーシア班>

|   | 氏名     | 年齢<br>生年月日      | 所属学校                           | 担当教科 |
|---|--------|-----------------|--------------------------------|------|
| 1 | 工藤 康暢  | 30<br>34. 5. 10 | 青森県立八戸北高等学校<br>青森県八戸市大久保町道8-3  | 英語   |
| 2 | 榎 潤夫美康 | 36<br>28. 1. 25 | 栃木県立真岡農業高等学校<br>栃木県真岡市下籠谷396   | 農業   |
| 3 | 新井 敏夫  | 38<br>26. 2. 22 | 埼玉県立熊谷農業高等学校<br>埼玉県熊谷市熊谷1760   | 農業   |
| 4 | 足立 欣一  | 32<br>32. 2. 27 | 千葉県立船橋二和高等学校<br>千葉県船橋市二和西1-3-1 | 社会   |

|    | 氏 名                | 年 齢<br>生年月日      | 所 属 学 校                           | 担当教科 |
|----|--------------------|------------------|-----------------------------------|------|
| 5  | 髙 崎 義 一            | 41<br>23. 3. 6   | 石川県立七尾高等学校<br>石川県七尾市藤橋町エ1-1       | 英 語  |
| 6  | 髙 橋 史 雄            | 43<br>21. 4. 30  | 名古屋市立名東高等学校<br>名古屋市名東区大針1-351     | 国 語  |
| 7  | 田 中 恵 次            | 54<br>10. 2. 8   | 滋賀県立東大津高等学校<br>滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2 | 英 語  |
| 8  | 井 上 喜 久 彦          | 54<br>9. 10. 22  | 大阪府立東豊中高等学校<br>大阪府豊中市新千里南町1-5-1   | 英 語  |
| 9  | 浦 木 勇              | 36<br>28. 2. 4   | 鳥取県立境高等学校<br>鳥取県境港市上道町3030        | 理 科  |
| 10 | 橋 本 英 治            | 29<br>34. 11. 1  | 広島県立西条農業高等学校<br>東広島市西条町田口242      | 理 科  |
| 11 | 山 本 一 夫            | 41<br>22. 11. 29 | 徳島県立三好農林高等学校<br>徳島県三好郡池田町字州津      | 畜 産  |
| 12 | 中 嶋 賢 夫            | 54<br>10. 1. 21  | 香川県立高松第一高等学校<br>香川県高松市桜町2-5-10    | 英 語  |
| 13 | 岡 本 美 喜 男          | 56<br>7. 10. 2   | 高知県立高知南高等学校<br>高知市棧橋通り6-2-1       | 教 頭  |
| 14 | 山 本 浩 一            | 48<br>16. 6. 5   | 大分県立山香農業高等学校<br>大分県速見郡山香町大字広瀬4742 | 社 会  |
| 同行 | 瀬 谷 義 之<br>中 川 寛 章 |                  | 国際協力事業団中国支部<br>国際協力事業団総務部広報課      |      |

## 2. 報告

### (1) 南米班 日程

| 月 日   | 曜日 | 目 程  |
|-------|----|--|
| 8月23日 | 水  | 19:00 RG831 東京国際空港(成田)発、ロス・アンジェルス経由  |
| 24日   | 木  | 06:15 リオ・デ・ジャネイロでRG902に乗り換え<br>13:00 アスンシオン着<br>JICAパラグアイ事務所訪問、日程打合せ、事業概況説明  |
| 25日   | 金  | 青年海外協力隊員の活動現場視察、前原鶏卵場視察<br>パラグアイ医療研究所及び人造りセンター視察   |
| 26日   | 土  | 日本語学校及び市内見学  |
| 27日   | 日  | 10:00 アスンシオン発(マイクロバス)<br>16:00 ストロエスネル着  |
| 28日   | 月  | 09:00 ストロエスネル発<br>イタイプ・ダム見学、JICAイグアス事務所訪問、イグアス移住地日本語学校見学、JICAパラグアイ農業総合試験場訪問、イグアス移住地日系農家訪問：久保田農園(果樹)、深見農場(畑作)<br>イグアス地元関係者歓迎夕食会 |
| 29日   | 火  | 07:00 ストロエスネル発<br>ブラジル入国<br>イグアスの滝見学<br>12:30 RG171 フォス・ド・イグアス発<br>14:00 サン・パウロ空港着<br>JICAサン・パウロ事務所訪問、日程の打合せ、事業概況説明、日本移民史料館視察  |

| 月 日   | 曜日 | 日 程  |
|-------|----|--|
| 8月30日 | 水  | サン・パウロ大学IPT施設、日伯友好病院視察<br>荒木農園（花卉生産者）視察  |
| 31日   | 木  | サウデ文化体育協会日本語学校視察、コチア産業組合中央会本部訪問、同組合の運営による市場視察<br>21:45 R G834 サン・パウロ発、リオ・デ・ジャネイロ経由 |
| 9月1日  | 金  | 米国ロス・アンジェルス経由  |
| 2日    | 土  | 13:10 東京国際空港（成田）着  |

氏名 高橋 敏明  
所属学校 宮城県米山高等学校  
担当教科 農業

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

### (1) 日系移民の歩み

ブラジルといえば混血の国、移民の国というイメージがあり、日本のような単一民族に近い国とは趣の大きく異なった国だろうという考えを持っていました。今回の視察を前にし、私にとって一番興味あったのは日本から移民した人達が未開の地でどのような考えを持ち、どんな生活をしながら今日の地位を築きあげてきたのかという点でした。

日本からの海外移住は1868年(明治元年)のハワイ移民を皮切りとし、1880年頃からのアメリカ本土、1899年のペルーに続いて、1908年からブラジルへの移住という形で始まった。パラグアイへの移住はそれより遅れ1936年から始まっている。こうして始まった日本人の新世界への移住は、すでに16世紀から植民地を建設したヨーロッパ諸国に較べると約3世紀もの隔りがあったが日本人特有のねばり強さで国際社会への実質的な仲間入りを果たしたのである。

パラグアイへの戦前の移住はわずか123家族、790名にすぎなかったが、戦後の移住は1954年に始まり現在日系の移住者は約7500名になる。

移住地の形式には3つの型がある。

- ① 移住先達者が造成を企画したもの。
- ② 日本政府とのつながりを持つ移住団体が造成したもの。
- ③ 未開地域土地分譲の波に乗って、集团的に土地を購入し、自然に形成されたもの。

このうちパラグアイでの移住は②に相当し、政府間の取決めにより移住地を設定し、国際協力事業団(或いはその前身)を介し、そこに入植を促進するという方法で行なわれた。現在同国内には日系人が関係する大きな移住地は7ヵ所ある。

ブラジルでの移住は③の形式が主で、大部分の移住者は最初コーヒー耕地の契約労働者としてブラジルでの生活を始めている。特に戦前の移住者の99%が農業契約労働者として渡航している。彼等はコーヒー農場でのコロノ生活を経験したあと、借地農、分益農などの中間形態を経て移民達は自作農(小地主)への道を辿った。その動向には二つの流れがあり、一つは大都市近郊の荒地を開拓し、蔬菜、果樹、養鶏などの都市近郊型農業を始めた。もう一つの形態は原始林を購入しコーヒー、米、綿、とうもろこし、フェイジョン豆などの栽培に従事する自営開拓農であった。いわゆる奥地型農業と言われるものだ。いずれにしろ彼等は

日本人的な特性を発揮しブラジルの農業に多大なる貢献をした。現在ブラジルに居住する日系人は約120万人と言われ農業分野に限らず多方面で活躍している。

そのような過程の中で彼等はどのようにして問題解決を行ない今日の地位を築き上げたのか知りたいことが数多くありました。

## (2) 技術協力

私は10年程前青年海外協力隊員としてバングラデッシュで農業機械の整備技術の指導を行なった経験があり、技術を定着させる難しさを体験しています。今回の視察を前にし、経済の低迷が伝えられる南米ではどのような技術協力が行なわれているのか興味がありました。

技術協力では受入側の要請と現状を踏まえた協力側の認識が一致しないと期待する成果が上がらないと聞いています。もちろん資金や機材の援助のみでは効果が上がらずやはり人造りあたりがポイントになるのではないのでしょうか。

そのような点も中心に視察を行ないました。

## 2-1. 国際協力の現場で参考になったこと

パラグアイ、ブラジルという広大な土地をわずか8日余りで巡ってきましたがまさしく百聞は一見にしかずで参考になったことはたくさんありました。その中で主なものを上げると次のようになります。

### (1) 移住者の農業に対する取組み姿勢について

各地で移住者の方々のお話を聞き、移住地の歴史、現在の状況等の説明を受けその開拓の歩みの中での種々の苦勞を推察することができました。今では通信や航空網も発達し昔には考えられなかった早さで人も情報も移動できますが、半世紀以上も前に移住した人達は未開の地へどのような気持ちを持ちながら入植したのでしょうか。私たちの想像を絶します。そして各種の悪条件の中でも希望を持ちつつ、夢を忘れず今日の姿を築きあげた努力には唯々感嘆あるのみです。

彼等は限定された生活の中で日本などから各種の作物の種を導入し、育種改良しつつ主たる農産物に育てあげました。農業における技術革新と普及を成し遂げたことが日系移民者の大きな功績と評価されています。これを概括すると次の4つになります。

- ① 日本及び外国から新しい作物の導入と育成
- ② 既存の作物についての育種改良
- ③ 栽培技術、生産技術の改良と向上

#### ④ 生産形態の革新（集約農業の誕生）

また作るだけでなく農業共同組合を組織し全視野的に農業に取り組みました。

サンパウロでコチア産業組合を見学しましたが、その規模の大きさに驚くのみで沿革を把握するだけで精一杯でした。

今から約57年前にじゃがいも販売の市場拡大を目的として、83名の入込で組織された組合が現在では組合員数13,441名を数え、従業員9,400名で各種の事業を展開しブラジル国内で20番以内に入る事業体までに発展し、農業における影響度は極めて大きいようです。

個々の方々のお話を聞いて、苦労しつつ、挫折しつつ、しかし農業に対する夢を忘れずその実現に努力している気迫に圧倒させられました。今の日本の農民が忘れてしまった意識がありました。若者の農業後継者不足に悩む農村地帯で生徒に教えている私にとって、彼等の持っている農業に取り組む姿勢を教えてやらねばと思いました。

#### (2) 技術協力について

新しい技術がその国で定着するためには現地の人達がどの程度理解し、習得したかに左右されると思います。その意味ではカウンターパートの占める位置は重要です。

異文化の技術者達が一つの技術をその地に定着させる為には双方の立場で現状を観察できる能力が必要です。幸いパラグアイ、ブラジル共に日本の技術協力の現場に日系二・三世の人達が頑張っていました。日本人の心を持ったパラグアイ人、ブラジル人が日本の技術を現状に合わせて定着させてくれるでしょう。

#### (3) 移住者達の人生観

パラグアイ、ブラジル滞在中移住者の方々から貴重なお話を伺うことができました。アスンシオン近郊で約20万羽の養鶏をおこなっている前原さんは、内外問わず著名な方で現在までの経歴をお聞きしましたが、やはり大変な御苦労をなさっていました。広島出身で移住前は農協の役員を行っていたようです。31年前に移住し、当初10年ぐらいトマト専業をしていましたが、その後現在の地で養鶏を始めました。前原養鶏場の国内シェアは約35%で、将来は30万羽まで増羽する予定であるといえます。

彼の言葉によると「道義的教育から本当の国際教育が始まる。つまり国際理解は人作りから始まる。私の夢は学校を作ることだ。4～500年後の日本はどうなっているのかを踏まえつつ長期的ビジョンで国や人間を考えられる人間をつくりたい」とおっしゃっていました。私たち教師の視野の狭さを痛感しました。

またパラグアイのイグアス移住地でお会いした久保田さんは、入植当時金も知識も無く果樹の栽培を始めましたが、将来はアルゼンチンへの輸出を考えているといえます。そしてサン



パウロ近郊で花作りをおこなっている荒木さんは、ヨーロッパ、アメリカへの輸出も考えているといいます。更に驚いたのはバイオの施設を農場内に作り独学で技術を習得し既に実用化していたことです。私たちの学校でもバイオの技術を生徒にこれからどのように教えようか、と悩んでいる最中なのに荒木さんはその先をいっているのです。彼はいままであまり苦労したことはなく、ステップバイステップで夢を少しずつ大きくしながらここまで来たと言っていました。

ふたりとも大学時代に先生に移住を勧められたといいます。そのせいか先代の移住者が持っていたような悲壯観は無く、むしろ困難を楽しんでいるようでした。

とにかく視野の広さと、新しい技術への取組みと考え方のスケールの大きさに圧倒させられました。

## 2-2. 国際協力の現場で気になったこと

### (1) ブラジルの経済不振、汚職、インフレの中での協力のありかたはどうあるべきか

視察を行なったある産業協同組合の資料の中に、年 800%を越えるインフレの中では今年度の予算に関して計画案は作成できないとありました。年度ではなく月毎に対応せざるを得なく、また新規事業は盛り込まないとも記入してありました。たしかにブラジルのインフレは私たち日本人には想像を越えており、そのような社会情勢の中での経済協力ははたしてどのくらいの効果をあげているのか疑問に思いました。また資金協力でも受取側の意識にずれがあればマルコスの活用をされては困るし、オープンな形での援助を納税者として望みます。

### (2) これからの援助のありかた

各地の協力事業の現場を見て廻りましたが、多少気になることがありました。それは援助で器を作ってやっても当時国でその運転資金、あるいは中身を準備できないケースがあるということです。またある技術を定着させるのに、その技術を利用する為に必要不可欠な基本概念が当時国政府すら理解していないケースもあるということです。つまり技術を受入れる土壌作りも必要ではないかということです。日本人の技術者が帰国すれば全て終わりでは援助の意味がないと思います。土壌作りができるまで援助を継続できれば幸いです。援助をどの程度まで行なうべきか判断の難しいところだと思います。

今後ODA予算が増えることを考えれば、その援助の質が更に問われるのではないのでしょうか。

### (3) 日本への出稼ぎ

直接 JICA の業務と関係は無いが、ブラジルで聞いたことで特に気になったことは、日系二・三世の人達の日本への出稼ぎ者が最近増加しているということでした。農業、商業の後継者たるべき人達が数多く日本に出稼ぎに行ってしまうと、せっかくここまで築き上げた日系社会になにかしらの歪が生じてくるのではないかと懸念を感じます。日本語学校においても若い男性で先生になる人が少ないようです。

## 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

### (1) 協力隊或いは専門家の人達の報告書の活用

日本だけに生活していると海外事情についてはマスコミを介する情報しか入ってきません。まして開発途上国に関しては偏見の眼鏡を通してのみしか一般の人達には届きません。世界各地で活躍している協力隊員や専門家の人達の生の情報を、学校現場のみならず一般の人達も利用できるシステムがあればと思います。せっかくの貴重な体験を埋れさすことなく多数の人達に知っていただければ国際理解の一助になると思います。

### (2) 各移住地における JICA の活動

JICA の移住事業は、移住者受入と移住地を斡旋するのが主たる業務かと思っていましたが、現地での説明をうけ医療、教育、研修、営農技術普及、融資等多方面にわたる教務内容を持ち、全ての面において移住者をバックアップしていることを初めて知りました。このような協力が日系人のみならずゆくゆくはその国の発展に直接結び付くと考えます。

### (3) 援助で造られた施設等の現地における活用状況や働き

パラグアイでは援助で造られた施設として人造りセンターを見学しました。このセンターはパラグアイの人達に日本を知ってもらうという目的のほか、子供から大人にいたるまでの広い年齢層を対象に利用してもらおうということで、語学教育、コンピュータ、ダンスやアスレチックの施設、更に大ホール、図書館などを備えた施設でした。見学した時は多数の人達がきておりそれぞれの内容で活況を呈していました。このような施設があれば当国の人達に日本を直接或いは間接的に理解してもらおう近道になるでしょう。

またアスンシオン大学保健科学研究所では、日本の援助でシャーガス病等寄生虫病研究プロジェクトが進行していました。これは当国における寄生虫病に対する研究技術の水準を高めることにより、国内の保健衛生の向上を目指しているとのことでした。成果が表れるのはま

だまだ先のことですが、このような地道な協力が今後更に必要でしょう。

サンパウロの日伯友好病院は、日系コロニア永年の悲願であったそうで88年に日本移民80年祭記念行事の一つとして、一部日本政府の援助で建設されました。この病院はその名前が示すように最新の医療施設を通じ、日系人のみならずブラジルの人達にも利用してもらい両国の友好親善の掛け橋になってほしいという意味があるようです。

いずれにしろ援助した成果がそれぞれの国においてどのように利用され、どんな評価を得ているのかを知らせることが、国際協力の必要性を国民一般から理解してもらう道に繋がるのではないのでしょうか。

#### (4) 日本語学校での教育現場

私たちは今回の視察期間中3ヵ所の日本語学校を訪問しました。前もっての知識は何もなく、同じような職場にいる者として新鮮な感じで説明して下さった方々のお話を聞くことが出来ました。校舎や授業風景をながめると田舎の昔の分校を思い出し、また少ない先生方でよくやられているなーというのが私の実感でした。

日系社会における日本語教育も世代と共に変わり、今では親自身日本語を話せない家庭も在り、外国語の一つとして教育せざるを得ない状況になっているといえます。それぞれに苦勞はあるようですが、子供たちに日系人としての自覚を持ちつつブラジル人としての意識を高め、将来国際人として日伯両国の掛け橋になってほしい、という希望を持って先生方は教えているとのことでした。

他文化（日本文化）を理解するには、言語の習得が必要だということをそれぞれの学校で、教育目標の中に取り入れているようですが、最近の日本語の乱れを嘆く声も聞き、現役の教員として耳の痛い話もありました。

問題点として最近若い男の先生のなり手がないとの話を聞きました。日本への出稼ぎに関係あるようです。また学校運営費や教科書に関係する問題点もあるようです。いろいろお話を聞き、我々でも何か協力できるのではないかという感じを受けました。

生徒に国際理解教育を進めるという観点では私たちの教育現場での活動と一致しており、参考になることが多々あるように思います。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

#### (1) 農民魂と開拓精神

一番大きな感動は、農業のスケールの大きさと移住した人達の農業に対する意気込みの強さ

でした。農業高校に勤めるものとして、この大きな農民魂を生徒達に伝授してやりたいです。今の日本の農業は、大部分が他産業に付随して成立っています。農政が悪い、農産物の自由化が悪いとかいう声を聞きますが、農業不振になった根本原因は農民の心を忘れてしまったからではないでしょうか。農業に夢を託した先人達の姿を日本の若い人達に教えたいと思います。

## (2) 国際理解と国際協力の必要性

私の勤務している学校は、宮城県の北東部に位置し農村地帯の真ん中にある学校です。2・3年前までは外国人と顔をあわせたことのある生徒はいませんでした。そんな田舎の学校ですが、昨年からは英語の指導の為に英国人が勤務するようになり、こんな田舎でも少しずつ国際化が浸透してきているようです。

最初生徒たちは、英語がうまく話せないという意識を持っているので、避けるように物珍しそうに観察していました。英語の単語だけでも通じるとわかればそろそろと寄って集りボディランゲージの意味も理解し、更に英国人の彼が少しずつ日本語が話せるようになってもう友達です。

今回の視察を終えて私は、更に国際理解と国際協力の重要性を再認識しました。私たちが毎日の生活の中に使っている外国産、外国製品がたくさんあります。しかし大部分が気付かずに食べたり、使ったりしています。田舎に住んでいても、何かしらの形で外国との繋がりを持っています。外国との繋がりを更に強化しなければ、将来の日本はあり得ないことはわかっているのですが、まだまだ偏見があります。他文化を理解する為にはたしかに言葉を憶える必要があります。しかし最初は単語だけでも気持は通じます。そして国境や言葉の壁があったとしても、相互理解をすることが友達になる第一歩であり、人々が共存できる世界だと思えます。そんな関係を教えてやるのも学校で教える者の義務でしょう。

帰国した二日後、私の学校でフィリッピンの高校生5人の一日体験入学を行ないました。最初気をもんでいたのは先生方のほうでした。授業の中に連れて行っても、休憩時間でも生徒たちは親しく話し掛けてきます。若さはきっかけだけを作ってやれば対応できるようです。むしろ偏見を持っていたのは先生方のほうでした。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

研修時期は夏休み中に設定してほしいです。今回の場合私の学校は、夏休みが終わってから出

発という形になったので授業のやりくり等多少問題がありました。東北北海道地区は夏休みが終るのが他の地区より早いので、考慮していただければと思います。

期間は自己負担分が多少増えても、もう少し長いほうがいいです。

## (2) 研修日程および訪問先

日程はたしかにハードスケジュールでした。わがままを言わせていただければ訪問先により、もう少し余裕を持った日程にしてほしいと思います。駆足で廻ってきた感じです。せっかくの機会ですから、自己負担分が増えても期間を少し長くしていただき、更に詳しい視察をおこなえるようにしては如何でしょうか。

訪問先については特に異存はありません。

## (3) その他全般的な所感

南米への海外研修が決ったとき、協力隊OBとして協力隊員の現場を視察することができるなど楽しみにしていました。10年前の私の場合とは単純に比較はできないが、改めて協力隊の活躍する姿を見学し、意識を新たにしたいと思いました。

アスンシオン到着の翌日、野菜栽培の普及活動をしている増田隊員の現場を視察することができました。普及活動における苦労話をいろいろ聞きましたが、農業にける何かしらの意気込みを感じました。将来移住を考えていると聞き、やはりそのような夢を持っている者が派遣地に南米を希望するのだろうかなどたくましさを感じました。

更にパラグアイ行きが決まった時点で、私の前任校での教え子に会えるのではないかと期待しました。幸いアスンシオン協力隊事務所の駐在員の方に連絡をとっていただき会うことができました。協力隊の派遣される国の通信や交通の事情は、ある程度察しがついていたので会える確率は半分だなどと思っていました。だから彼が会いにこちらに来るとい連絡を受けた時からそわそわし始めました。4年振りくらいで会う形になるがどれくらいたくましくなったのかなと想像を巡らしました。会ってみると童顔だった顔にも想像通り逞しさが漲っていました。現地での生活や活動などの話を聞きつつ、かつての生徒が自分のやったことと同じ事をやっているんだなどと考えると奇妙な喜びを感じました。また彼の任地がアスンシオンからシューダデステ(ストロエスネル)に私たちが移動する途中にあると聞き、JICAの担当者をお願いし途中立寄っていただくことができました。プラス・グァライ入植地における実験圃場で、野菜栽培のデモンストレーション活動を他の隊員といっしょに行なっていました。彼は任期を1年延長するというので、何年か後にまた再会できることを楽しみに彼の任地を後にしました。

その後何人かの移住者の方々とお話を得る機会を得ましたが、それぞれに感動を感じました。年輩の方々は古き良き日本人の心を持ち、また若い方々は将来に掛ける夢を持ちそれぞれに哲学を持っておりました。農業にかぎらず日本人を考えるのに本当に良い機会を与えていただきました。

各種の国際協力の現場を視察してみると、成果がすぐ表れるものや、長期的観点から地道な働き掛けが必要な協力事業などいろいろありましたが、いずれにしろ現地の人々と一緒に活躍している専門家或いは協力隊員の方々の目が輝いていたのを発見し、以前から抱いていた国際協力の現場へもう一度という気持ちが更に強くなるのを感じました。機会があれば参加して汗を流してみたいものです。

このような機会を与えていただきました J I C A の関係者皆様に本当にお礼申し上げます。視察期間中に得た事柄を今後教育現場で生徒の国際理解のみならず人間教育に役立つよう活用したいと思います。ありがとうございました。

氏 名 石 亀 捷 泰  
所属学校 秋田県立金足農業高校  
担当教科 農業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 18才以上の青年を農業移住者として受けいれている親日国パラグアイの農業について
- (2) 日本人移住者、青年海外協力隊員およびJICAの業務に対し、パラグアイ、ブラジル両国民の期待するものについて
- (3) 移住者子弟の教育について
- (4) 日本人移住者が導入した農作物の栽培状況とその販売について

2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと
  - ア. 青年海外協力隊員（農業）の活動状況と現地での生活を見聞できたこと。
  - イ. 養鶏、畑作、果樹、草花等の移住農家を訪ね、それぞれ懇談できたこと。
  - ウ. イグアス移住地を訪ね、各施設の概要を紹介いただいたこと。
  - エ. JICAを中心とした日本の援助状況を見聞できたこと。
- (2) 気になったこと
  - ア. 若い移住者に会えなかったこと
  - イ. 教育関係の施設・設備の不足および20代、30代の若い教師に会えなかったこと
  - ウ. 「人造りセンター」という呼称

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきと考えられる協力、プロジェクト等

- (1) 移住地内での栽培試験結果から導入品種を決定し、移住者、パラグアイの農業に貢献しているパラグアイ農業試験場のこと
- (2) 住民と生活をともにしながら地域農業の向上のために活動している青年海外協力隊員のこと
- (3) JICA以外の民間からの寄付金で建設された日伯友好病院のこと
- (4) 人造りセンターの活用状況について

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体策あるいは材料として考えていること

- (1) 県高国協研修会での報告
- (2) 県高国協機関誌「国際教育」11号への寄稿
- (3) 研修報告要請の高校での報告
- (4) 「海外研究クラブ」指導資料として

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

時期は適当と思うがブラジル国内での研修期間が短い。

##### (2) 研修日程および訪問先

ア. パラグアイに関しては適当と思うが、ブラジル国内での研修日程に余裕がほしい。

イ. 訪問先は適当と思う。

##### (3) その他全般的な所感

多数の日本人移住者が生活している南米についてこれまで各種の資料を手にしてきたが、多くの疑問を抱えたままであった。このたびの研修参加により、パラグアイ、ブラジル両国民の生活、日本人移住者の生活、JICAの活動、そして青年海外協力隊員の活躍などを眼の当にし「百聞は一見に如かず」を体験させていただきました。稔り多い研修の機会を与えてくださったJICAの皆様に心から感謝申し上げます。



氏 名 臼 井 良 雄

所属学校 神奈川県立保土ヶ谷高等学校

担当教科 外国語（英語）

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 国際協力事業団の業務の実態
- (2) 移住者や日系人の活動状況
- (3) 各国の社会状況

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

ア. 限られた日程の中ではあったが、国際協力事業団の業務内容をそれなりに理解することができた。援助が、効果的に実施され、立派な業績をあげていることを援助された側の方々から直接聞くことができた。

イ. 青年海外協力隊員の献身的な態度に接して、その後継者を育成する必要性を再認識した。

ウ. 移住者がジャングルを切り開いて開拓地をつくった有様を知って、筆舌に尽くしがたい苦勞を知った。また、彼らが日本人としての誇りを持って生活し、その国で大変尊敬されていることも知ることができた。

エ. 発展途上国には解決しなければならない問題が山積しているが、努力次第で様々な面で成功できる可能性があり、「夢が実現できる国」であると思った。

### (2) 気になったこと

ア. 最近海外へ行く日本人が多くなっても、移住者として行く者がほとんどなく、逆に海外に移住した日本人が、日本へ出稼ぎに出かけている現状を知った。

イ. 日本語学校で日本語を指導する教師が不足していること、また、教師へ払う給与（財源）が不足していることもわかった。

ウ. 日本から派遣された専門家が技術援助をする場合、必要とされる機材や機器が不足しており日本から導入しようとしても、国産化を推進しているため外国からの機材や機器の導入が法的に出来ないこともあり、迅速な技術指導が出来にくいこともわかった。

エ. ほとんどの日本の青少年が先進国へあこがれて、発展途上国へ目を向けることが少ないので、今後より一層開発教育を推進することが必要であると感じた。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきと考えられる協力、プロジェクト等

- (1) パラグアイ「人作りセンター」：このセンターでは、様々な講座を開講して、生涯学習や職業教育を実施しており、国民が効果的に施設を活用していた。このように一般の国民から愛されるような施設が、一番効果的な援助であると思った。
- (2) パラグアイ農業総合試験場：地域農家に畑作や野菜栽培の技術改善と品質向上に貢献し、日本の移住者だけでなくその国の人々にとっても大きな支えとなっていた。
- (3) パラグアイ医療研究所：眠り病の媒介をする昆虫とその菌を撲滅する研究（プログラム）が、日本の援助でなされていたことは大変喜ばしいことであった。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 写真やスライドで生徒にブラジルとパラグアイを紹介して、発展性のあるこれらの国々についての知識や情報を提供すること。
- (2) 国際協力に関係する目を向けさせる指導の一環として、課題学習を企画したいと考えている。例えば、生徒に国際協力に関する新聞記事を収集させ、それについての感想文を書かせること。
- (3) 青年海外協力隊の活動状況が録画されているビデオや映画を通して、後継者を育成すること。
- (4) 開発教育を推進する場合、「海外援助」や「クロスロード」誌の資料を通して生徒たちに発展途上国への関心を向けること。
- (5) 今回南米で研修した様子を講演会等で伝えること。
- (6) 国際理解で外国語教育が大切な役割を果たしているため、語学指導を一層継続すること。教育課程の第二外国語の選択科目にスペイン語の導入を推進すること。

## 5. 所感及び意見

### (1) 研修時期及び期間

ア. 研修時期：7月下旬から8月上旬までが望ましい。

イ. 期 間：約2週間程度必要と思われる。

### (2) 研修日程及び訪問先

ア. 研修日程：視察は、午前と午後各1箇所程度が望ましい。

イ. 訪 問 先：パラグアイとブラジル

### (3) その他全般的な所感

ア. 海外研修をより効果的に推進するには、「海外研修の手引書」を作成して、事前に配布して、読むべき本のリストを紹介してはいかがでしょうか。

イ. 今回かなり日程が詰まっていたが、多くの方々と懇談し、有意義な時間を過ごすことができて大変よかったと思っている。

ウ. 日本人が21世紀においても繁栄を継続し、かつ世界の指導的役割を果たすために外国の情報を多角的かつ迅速に収集する必要がある。現在のように個別に資料を収集していたのでは、損失が大きいため、それをまとめたり、評価したり、またその情報を効果的に使用できるような機関や施設の設置が必要であると思う。

エ. 発展途上国の国民と移住者のたくましい生活力に接し、彼らの生き方に心を打たれるものがあった。

オ. 国際協力事業団が立派な事業を実施しているのに十分理解されていなかったり、誤解されて報道されたりしていることもあり、広報活動にもっと予算をかけるべきだと思う。

カ. 国際協力事業団本部の方々及び現地の職員の方々が、献身的に我々のお世話していただいたことに対して深く感謝している。教員の視野を広めるために、このような海外研修の継続を今後ともお願いしたいと思う。

氏名 中島勝人  
所属学校 山梨県立峡北農業高等学校  
担当教科 果樹 組織培養

## 1. 視察等に際して特に主眼を置いた点

- (1) パラグアイ、ブラジル国の農業、社会、教育事情がどのように営まれているかを視察する。
- (2) 国際協力事業団の実施している国際協力の現場を視察し、国際協力事業が果たしている効果、内容等を研修する。
- (3) 移住者、日系人等の活動現場を視察し、その歴史的背景を理解すると共に今後の展望について探る。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

- ア. 国際協力事業団の実施している国際協力事業（専門家、協力隊員の活動、無償資金協力による施設等）が、現地において効果的にいかされている。
- イ. 開発途上国の援助は、金や物ばかりの協力だけではなく、「心の開発」であること。つまり、教育というものに着手しており、その例としてパラグアイの「人造りセンター」があった。このセンターにおいて語学力（英語、日本語）コンピューター体力向上、文化活動等がいかされ人造り（教育）に大きな効果をもたらせつつある。
- ウ. 農地の開発において、原始林の開発を行なうが、この開発にあたり土壌侵食防止、乾燥害防止等を考えての無耕起農法は、小麦、大豆の収量を増加できること。また、大型機械の導入による農業機械の作業システム等が参考になった。

### (2) 気になったこと

- ア. 電気、ガス等のない未開発地で働く協力隊員の健康管理はいかになされているのか心配であった。
- イ. 協力事業による移住者日系人へのバックアップと、意欲と夢をもって必死で働いた人々の成功事例を見てきたが、このように移住して成功した日系人の人達に対する住民の感情はどのようなものであるか気になった。

(3) わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

ア. 国際協力がどのようなものであるかの普及

国際協力事業の内容を日本に住む人々は具体的に理解していないように思えます。私自身も今回この視察研修に参加して細かな実態を把握して驚いている次第です。この援助協力の内容をもっと本、ビデオ、TV等で紹介して若者に理解できる場をつくり普及する。

イ. 移住者本邦研修の交流

移住者の2世3世の本邦研修により国際交流がより一層活発となり多くの日系人に日本を理解していただきたい。また、できたら日本の高校生が外国語研修としてパラグアイ、ブラジル国へホームステイできるとよいと思う。

3. 今後の教育指導に生かす具体的方策、もしくは材料として考えていること。

(1) 国際化時代といわれる中で農業教育をより一層充実させていくには、他国の農業実態を理解する必要があると思う。その為には一年間程度の海外研修制度を取り入れ農業の視野を広めていくことが大切ではないかと思う。

(2) 写真、スライド等で、パラグアイ、ブラジル国の農業、文化、教育について生徒に話す機会を多くつくっていく。

(3) 本校教職員にも上記同様な形で、報告会をおこない国際協力事業や南米について理解してもらおう。

(4) 学校新聞、農業機関紙、PTA新聞等に投稿してパラグアイ、ブラジル国を知ってもらおう。

4. 所感及び意見

(1) 研修期間

南米は土地が広く移動に時間を要し、研修場所が多いと体力的にたいへんなので研修期間をもうすこし長くしてもよいのではないかと思う。例えば8月23日～9月6日(15日間)

(2) 研修日程及び訪問先

内容がもりたくさんで楽しみであった。全日程の中にブラジル国研修期間がすこし短いの、パラグアイ国と同じような郊外の視察をしたかった。

訪問先での研修は、すべて興味があるものばかりでたいへん勉強になりました。

(3) その他全般的な所感

国際協力事業団の職員の皆様の暖かな御協力により、何不自由することなく研修できたことに感謝の念でいっぱいです。現地の方々と言葉が通じないので細かなところまでお願いしたり雑用的なことまでしていただき誠にありがとうございました。

今回、もりたくさんの研修場所があり交流の場がもてましたが、旅行前に一度五人が集まって事前に打ち合わせをしておく必要があったように思えます。例えば、スライド係、ビデオ係などをあらかじめ決めておいて、同じような行動を省略したり、現地視察に対する記念品（過剰になっては困るが）のようなものを具体的に話し合っておけばよかったように思えた。

氏名 小 串 泉  
所属学校 岐阜県立土岐北高等学校  
担当教科 商業

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 技術協力の具体的な事例の認識
- (2) 青年海外協力隊の実際的な活動例
- (3) 日本人移住地の農業経営等の現況
- (4) 訪問国の文化・風俗・習慣などの研修
- (5) 訪問国の情報処理教育に関する推進度

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

#### パラグアイ

- ア. イタ地区での青年協力隊のイチゴ栽培指導等の活動現場
- イ. 医療研究所における「シャーガス病」寄生虫病研究協力プロジェクト
- ウ. 人造りセンターにおける英語・体育・コンピュータ等の講習会
- エ. イグアス移住地の日本人農業経営およびイグアス日本語学校の教育現場

#### ブラジル・サンパウロ

- ア. IPT (サンパウロ州技術研究所) における JICA 専門家活動
- イ. 日伯友好病院の医療施設と最新鋭医療機器設置援助の実際
- ウ. サンパウロ市場の活況

### (2) 気になったこと

日本では小・中・高校ともパーソナルコンピュータ活用を目標とする学習が始まっていますが、日系移住者の子弟にも情報活用教育(キーボード操作・ワープロ実習等の基本から)を実施するの必要を感じています。

パラグアイのイグアス移住地では日系商業経営関係者からは「そろばん」学習への期待を、サンパウロの日本語学校では正確な金額記入の練習を、それぞれ見聞しました。わが国の商

業高校の商業科目（商業簿記・珠算・ワープロ・コンピュータデザイン・表計算ソフト実習・文書事務等）をカリキュラムに導入したり、職業高校レベルの学校制度の創設を提案します。青少年への教育制度を充実し10年、20年後の展望に対応することが課題であると確信します。

（教育現場での指導者として派遣が必要であれば積極的に希望します。）

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

#### （1）パラグアイ共和国における国際協力事業団の全業務の概要

ア. 移住交付金関係事業とその具体的な事例

イ. 移住出資金関係事業とその具体的な事例

ウ. 経済技術協力事業とその具体的な事例

（注）わが国ではほとんど知られていない。移住地とは「ブラジル」なりとの受けとめかたが普通でもある。

#### （2）IPT（サンパウロ州技術研究所）におけるJICA専門家活動の現況と成果

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

《勤務校（岐阜県立十岐北高等学校）の職員・生徒を対象》

（1）JICA事業および訪問国に関して自主作成スライドによる概要報告

（2）JICAのパラグアイ業務概要のパンフレット作成

（3）イグアス移住地概要のパンフレット作成

（4）コンピュータグラフで見る「イグアス移住地概況」

（5）1988年度イグアス日本語学校優秀作文集「復刻」版の発刊

（注）（2）～（5）は本校の国際・情報コースに在籍する生徒の研究課題とし、情報機器（パソコン・ワープロ）を活用しての学習成果としたい。

《全国高等学校国際教育研究協議会中部ブロック会議（平成2年2月の予定）》

（1）パラグアイ共和国における国際協力事業団の全業務の概要

（2）JICA事業および訪問国に関しての自主作成スライドによる概要報告



## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

ア、希望時期は8月上旬

イ、期間は全体で2週間ぐらい

### (2) 研修日程および訪問先

訪問国の滞在費などは自己負担としたうえで、パラグアイで10日間ほどの研修が必要と考えられる。(サンパウロは2日ぐらいで最良)

訪問国ではさらに、標準的な生活状況や生活意識、あるいは訪問国の教育現場などの視察を希望したい。

### (3) その他全般的な所感

国際協力事業団(JICA)職員の、研修に対する献身的なご指導に感謝いたします。

## (2) タイ班 日程

| 月 日   | 曜日 | 日 程  |
|-------|----|--|
| 8月24日 | 木  | 11:00 成田発 (TG641)<br>15:30 バンコク着   |
| 25日   | 金  | 09:00 カセサート大学研究協力視察<br>16:00 JICA事務所   |
| 26日   | 土  | 休 日 (バンコク市内およびアユタヤ遺跡他見学)   |
| 27日   | 日  | 12:00 バンコク発 (TG104)<br>13:05 チェンマイ着<br>チェンマイ市内視察<br>協力隊員との懇談会                            |
| 28日   | 月  | 10:00 メジョー農科大学視察 (協力隊員)<br>14:00 チェンマイ大学視察 (協力隊員)<br>17:35 チェンマイ発 (TG107)<br>18:40 バンコク着 |
| 29日   | 火  | 10:00 タイ日本人学校視察<br>14:00 タイ東芝視察  |
| 30日   | 水  | 11:00 バンコク発 (TG640)<br>19:00 成田着   |

氏 名 深瀬 教夫  
所属学校 山形県立上山農業高等学校  
担当教科 農業

### 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 近くて遠い国であったタイ国を自分の目で見て、よく知ること。  
(気候、日常生活、産業、教育、歴史、経済、日本人に対する考え方など)
- (2) JICAによる技術、資金援助の現況と、どのように役立っているのか。又、今後の課題はどうあるべきか。
- (3) 青年海外協力隊員の活躍ぶりを知り、現場で実践されている立場から生の声を聞いて、自分なりに把握する。

### 2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと  
異文化のハンディをのり越え、現地の人々から信頼を受けながら相手の身になって「与える」でなく「育てる」という気持で実践されていることに感服した。国際協力の原点であろうと理解したい。
- (2) 気になったこと  
ア. 援助や協力はどの程度のレベルまで行うのか、将来技術の定着や施設設備の活用などが継続され自力で発展できるのであろうか。  
イ. タイ国は日本に対し無償援助の希望だが（アメリカを初め他国からはほとんど無償）日本の一部有償に対して他国から非難されている点。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

#### 青年海外協力隊及び技術フォローの民間出身専門家派遣の活動状況

限られた期間内で、しかもボランティア精神に基づき、国民性からくる困難を克服し努力、奮闘している姿とその貢献度。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 編集したスライドにより、タイ国の実情、JICAの事業内容や活躍状況を授業や他に発表の機会があるごとに紹介し、広く知ってもらおう。
- (2) 県高等学校国際教育研究協議会の機関誌「国際教育」に視察記を掲載する。
- (3) 研修視察先で戴いた資料をこれまで発行されている国際協力や国際教育に関する資料と共に学校図書館の閲覧室に展示する。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

- ア. 8月下旬(2学期始業時期)よりは夏季休業の初期7月下旬~8月上旬の方が良い。
- イ. 適切な期間(6泊7日ぐらいが)であったと思う。(心身の疲労度からみて)

##### (2) 研修日程および訪問先

- ア. 全般的に無理のない研修日程であったと思うが、バンコク市内の交通渋滞による時間のロスが目立ち訪問先へ影響を与えた。
- イ. 地元旅行会社のバスの出発が大幅に遅れ(研修最終日)「防災リハビリセンター」の視察が中止になったのが残念でした。
- ウ. 農業立国と言われるタイの標準的な農村集落、農家や経営状況等について現地研修の機会があれば幸いでした。

##### (3) その他全般的な所感

- ア. 今後、日本と深いかわりが必要となる近くて遠い東南アジア、しかも一国に絞って研修の機会を得たことは大変有意義でした。
- イ. JICA事務所にて、加藤次長のお話の中で「同じアジア人でお互い知らな過ぎる面が多々あるのではないか、もっと心とか人間同志の文化的な交流が必要ではないか」と力説されていたのが印象的でした。同感だと思った。
- ウ. この度の研修でタイ国の概要をつかめたとしても、実際見聞できたのは一部であり、まだまだ理解に乏しい内容もあると思う。帰国後、タイに関することや、広く海外で高く評価されているJICAに関することがテレビ、新聞、雑誌に出るごとに、より強い関心をもって見るようになります。理解を深めていきたい。
- エ. 同行されたJICAの木下氏、山田氏には色々な面でお世話戴いた事に対し深く感謝致します。

氏名 佐川 芳雄  
所属学校 福島県立福島農蚕高等学校  
担当教科 校長（農業、理科）

8月23日（水）東京水道橋グランドホテルで眠れぬ一夜を明かし、5：00起床。東の空を眺めると薄曇り。ホテルよりタクシーでリムジンバス停の箱崎に向い、TG691便11：30発バンコク行航空機に乗るべくバスは成田に向け走った。

夏休みも終りに近づいているので、乗客は少いだろうと予想していたが、外れ、物凄い混雑ぶりで、まず、国際化時代を強く感じさせられたのである。

30分遅れでTG641は、バンコクを目指して飛び立った。

16：00頃「ベトナム上空だろう？」と客の声で窓をのぞきこんだ。感じでは山肌が赤く見え、緑の豊富な日本との差を強く感じた次第。

機内食はジャガイモ、牛肉のウマ煮、サーモンの生、野菜サラダが出されたが、きれいに平げ、特に野菜サラダが美味であったと皆で感想をのべあった。

5：39、無事バンコク空港に到着。晴気温32度。南国タイの第一歩を踏みしめたのである。

その後空港に於て、日本円をバーツに切換えたり、早くも土産品を物色する等して、チャーターされたバスで市内アリストンホテルに向い、7：39、無事到着したのである。事前研修が徹底したせいか、頭の中は常にパスポート、現金の取扱い、荷物の保管等々疲れた一日のようであった。

はげしい時代の波にもまれてきた東南アジア諸国のなかで、1,000年以上も独立を保ってきた国。食糧暴動と血のクーデターもみることなく、メナム川の流れにいだかれて安定した国づくりをまっとうしてきた国“タイ”とは“自由の国”という意味である。第2次大戦後、この国の国際的な地位は上がり、首都バンコクは東南アジアの中心地帯になった。高層ビルの林立する近代都市だが、市内の見学中にもつくづく感じたのであるが、数多くの寺院がこの国の仏教の香りをつたえてくれるのである。その意味では、お寺と川の町がバンコクのすべてのような気がする。バンコクがいかに近代化されても、はなやかな寺院と網の目のような大小の川をおおいつくすことはできまい。

“母なるメナム”の岸へにはウッド・アルンがこの街を象徴するかのようそびえたっている。対岸には華麗な色彩と曲線を持った王宮と、エメラルドブツダとして名高いワット・プラケオがあるなど有名無名の寺院が熱心な参拝者をおもむいている。

小乗仏教の国タイには、23,000もの寺が散在していると聞いている。バス運転手の思い違いで市内をずいぶん廻ったような気がするが、カセサート大学研究協力視察を無事完了して、JICA事務所に

到着した。(後でカセサート大学研究協力については詳細に報告したい)

そこでは斉藤所長、加藤次長さんから資料をもとに懇切丁寧な御指導を頂き、感謝申しあげる次第です。特に斉藤所長さんからは、タイの社会経済状態(タイの思想ならびに変化状況)が詳細に述べられ理解できたように思いますが、印象づけられた事は「王の権限」という言葉です。軍人、警察が上位で農民が下位民族といった思想が、今でも根強く生き続けていることに強い印象を受けた次第です。現在のナーイと目される官吏、軍人たちの間には、かつてのナーイと同様、農民を軽視し、都会で西欧文化を享受しながら独自の都市文化をつくり出し、農村との対比において物質的に豊かな生活を送っている。そして、一方プライと目される農民大衆は、農村で伝統的土着文化を固執し窮乏にあえいでいる。つまり過去のサクディナ制下の社会と現在の社会も構造的には同じようである。

サクディナ制下で構成されたナーイ、プライ二階層の特徴は、この両階層が地理的、文化的に分割されているというところである。今日のタイ社会に於ける都市と農村の対比から、タイには二つの社会、二つの文化があるという人がいるが、都市に住む支配階層と農村に住む被支配階層の間はそれほど隔絶しているのである。

このようにサクディナ制社会以来、地理的、文化的に分割されてきた二階層をつなぎとめ、一つの国一つの社会にまとめているのが国王であり仏教なのである。

仏教と結びついた国王の存在は、一般国民の国民意識を高揚して国民統合に大きな成果をあげているのである。

一方仏教を使って、因果応報と功德の思想を植え付けることによって、支配階層(現在のナーイ)の恣意を許す結果になっている。いうなれば仏教が社会矛盾の温存に一役かっているように見える。1973年学生が決起し、軍事政府を打倒するという事件が起きた。その結果バンコク中心に民主主義ムードが高まり、社会矛盾が是正されるかにみえたが、1976年の軍部クーデターでそれも立ち消えになっている。

しかし社会矛盾は、都市と農村の所得格差の拡大という形で表面化してきているのが現状であって、いずれはその矛盾解決を迫られるのではないだろうか?

斉藤所長さんの言葉が今も強烈に私の耳に残っているのは何故なのだろうか?

即ち、寺院、学校の伝統と近代教育導入の歴史を踏えて着実に整備を計っている。経済成長率も6-7%上昇し、農業人口も減少したとはいうものの77%代を保っているが、外にはカンボジア問題、ひいてはベトナム侵攻の脅威、内にはクーデター、総選挙という難問題をこなしつつ選都20年を祝ったのである……………と?

## 我が国の対タイ援助について

### (1) 我が国の協力実績

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| ア. 1988年度経済協力総額   | 941.3 億円 (仮集計) |
| 有償資金協力 (OECP)     | 758.2 億円       |
| 無償資金協力 (外務省 JICA) | 99.8 億円        |
| 技術協力 (JICA)       | 83.4 億円        |
- イ. 我が国の援助は、第3次5ヶ年開発計画時(1972~1976年)から本格化され1975年からは常に援助額第1位を占めている。
- ウ. 1987年歴年実績で見ると、タイの受け取る二国間ODAの約7割が我が国からの援助である。
- エ. 我が国のタイに対するODA総額は、例年900億円前後で推移しており、1987年度実績で見るとODA全体では被援助国中第4位(1位比国、2位インドネシア、3位印度)無償資金協力は第2位(1位バングラディシュ)、技術協力は第1位(2位インドネシア)、円借款は第5位(1位比国、2位インド、3位インドネシア、4位中国)となっている。

### (2) 日、タイ、技協、無償30年ガイドライン

- ア. 対日貿易の不均衡の是正等を目的として1985年6月「タイ・日経済関係構造調整白書」を発表。本白書の内容は、貿易の促進、投資の促進、計画的な経済協力の受取りが3本柱。
- イ. 本白書を受け1985年11月DTECは「タイ、日経済技術協力3ヶ年計画ガイドライン」を作成。第6次5ヶ年計画に沿った開発の推進、輸出の促進、輸出関連投資の促進及び民間部門の活性化を援助要請分野の4本柱として選定。
- ウ. DTECは1986年11月に初年度分の技協、無償要請案件を提出。1987年5月の「タイ技協、無償年次協議」で1987年度に実施されるべき案件を採択(要請案件数38件、採択案件数19件)。
- エ. 1989年度の実施案件については、DTECは1988年6月の第1次要請案件を同年12月に第2次要請案件を提出1989年5月開催の「年次協議」で採択(要請件数56件採択案件数22件)。

### — 参考として —

- ア. 2つの目標
- 経済的 …… 5%以上の経済成長 390万人の雇用所得配分及び経済バランスの改善
  - 社会的 …… 社会開発の促進 BASIC-NEEDSの普及、地域格差の縮少

## イ、3つの戦略 10のプログラム

- 開発効率の向上  
総合経済開発（経済、財政の安定化促進）社会、人的資源開発、天然資源、環境開発、科学技術開発  
国家管理改善（開発マネージメントの改善と見直し）  
国営企業効率化
- 生産構造の再調整  
生産、マーケティング、雇用開発  
基本的サービス（インフラ）整備
- 所得 繁栄の公平配分  
都市 選定地域開発  
地方 農村開発

## タイ・カセサート大学研究協力

(1) 協力期間 昭和62年4月16日～平成4年4月15日

(2) 所在地 タイ中部ナコンパトム県カンベンセン（バンコク西方80K）

(3) 我が方協力機関 文部省 農林水産省

(4) 要請の背景

カセサート大学に対し、研究の強化・充実のため、研究計画及び農業普及、機械化計画の二元協力を行ってきたが、両プロジェクトの終了に当り、対象とならなかった分野及び成果が不十分な分野を一元化し第2段階協力として要請してきた。

(5) 目的内容

タイ国農業教育の最高機関であるカセサート大学の総合研究センター、農業機械センターにおいて研究能力の拡充を通して農業開発に寄与することを目的に研究を行う。

ア. 作物改良のための生物化学と育種

イ. 農業機械と品質保証技術

ウ. 農業機械化技術の開発

(6) 問題点

無償資金協力により供与された施設、機械のメンテナンスに多額のローカルコストを要する。

(7) 1988年実績

長期専門家 5名                      短期専門家 13名                      カウンターパート 5名

機材供与 57百万円                      1979～1981年無償（39億円）



## タイ農業協同組合振興計画

- ア. 協力期間 1984年～1989年
- イ. 実施機関 農業協同組合省 協同組合振興局  
(バンコク及びナコンラチャシマ県)
- ウ. 案件概要

農業生産性の向上、流通の合理化等による農業構造の再編整備に必要な農業協同組合活動の活性化を計るためナコンラチャシマ県の五つのモデル農協を対象として宮農指導、農協経営、販売購売事業、研修に係わる指導助言等

### 参考資料

- 国際協力事業団 事業概要 1989年5月版
- 世界の国シリーズ 東南アジア
- 世界の旅 インド 東南アジア

氏 名 佐 藤 一 彦  
所属学校 群馬県立利根農林高校  
担当教科 農業経営

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 政府開発援助（ODA）の役割について
- (2) タイ国における国際協力事業団（JICA）の役割・技術協力について
- (3) タイ国における青年海外協力隊の活動について
- (4) タイ国における社会と教育、社会、教育情勢  
政治と経済  
宗教、仏教的世界観  
日本との交流 …… 「歴史的交流、日本人の商業活動」など

## 2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと
- (2) 気になったこと

私の職場においてJICA、ODAの役割や活動について十分な認識もなくやっと名前を知っている程度である。今回研修に出発する前などある同僚から「ああ、あのマルコス夫人の資金源ね」と軽くいなされ大変残念な思いをした。

私はクラブ顧問の関係上、日頃の活動、新聞やテレビ報道、毎月発行の国際協力、JICA、青年海外協力隊員の人達との交流で自分なりに十分理解していると思っていた。しかし、今回実際に現地のJICA事務所や事務所の役割、技術協力としての、カセサート大学研究協力（生物工学）米山調整員、生物工学のための施設、設備、農業機械化センターの農業機械の指導とタイ国の農業機械化と機械の改善、メジョー農科大学での小暮隊員の農業における情報技術の利用（農業施設のコンピュータ制御）、チェンマイ大学での柳井隊員の繊維化学（有機化学）の学生への指導、竹村、三浦両隊員の日本語学校における日本語指導、バンコク・日本人学校視察、タイ東芝視察などおして見たことは、今まで自分なりに理解していたと思っていたことと大変違い、自分の情報の少なさにしきりに反省する所であった。まさに百聞は一見にしかずとはこのことである。

先日、新聞報道で来年度予算、ODA9.4%増という見出しを見たが、さてJICAにおいて昭和49年度事業規模272億円、平成元年度約2,741億円と予算や事業規模が着実に伸びて来ているのに、定員増が発足当時から皆無に等しいとは大変な驚きである。果たして事業規模を拡大しながら十分な人員的配置もせず継続的な援助協力が出来たのか、その場かぎりの単発的援助協力で終わってしまっていないのか、又、疑問でもあり心配である。

タイにおいて、日本の経済進出（大学生は経済侵略と言っている）はすさまじいものである。バンコクで目に映ったものすべて、乗用車、トラック、タクシー、バス、バイク、建設重機、農業機械、電化製品、日本の商品に見えたと言っても過言ではない。まさに日本の経済植民地のような。1974年の田中首相の訪タイの時の事件もなるほど、納得のいく所である。その後日本側によるODAの経済技術援助、タイ技術者の養成やタイ社会へのボランティア活動等によって摩擦は少なくなっていると聞く。

カセサート大学、農業機械化センターの説明の中で工業製品など諸物価の高騰に比べ農産物価格の低迷は農民にとって大変な打撃となり、都市労働者の所得と農民所得の格差はますます拡大してきている。それは農業の近代化、農業機械の導入に大変困難であるとのことであった。

タイ研修中にカンボジア問題のニュースが世界を駆けめぐり、世界の目がこのインドシナに向けられていた。タイでは、ベトナム、ラオス、カンボジア難民を70万人もかかえているという。日本では約2,000人であるという、はずかしい限りである。

このような、情勢下で日本の国民総生産、国民所得、しいては軍事費を考えた時、果たしてこの程度の経済技術協力、援助でよいのであろうか。もっと国際的視野に立ち物事を考えていかなければならないと思う。又、少しでも東南アジアの人々の生活向上のためにも生きた援助となるように援助拡大が必要である。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

青年海外協力隊の活動、日本が世界に誇れる活動であるが、国際化時代と言われながら国内での認識はまだまだ不十分で残念である。この活動を積極的に各方面に紹介すべきだ。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

(1) 群馬県国際教育協議会として

群馬県高等学校国際教育研究協議会において

顧問研修会開催予定 1990.3 水上

協議報告として、平成元年度高校教師海外研修報告ならびに国際交流について問題提起

群馬県高等学校国際交流クラブ連盟主催、夏季講習会（全クラブ代表参加）において研修報告 1990.8 前橋

県内クラブ交流としての参加報告

(2) 校内の活動として

クラブ活動の充実、授業での利用

（農産物の自由化、タイ農業についてなど）

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

それぞれ希望があるがこの時期、期間で良いと思う。

(2) 研修日程および訪問先

日程についてはやむをえないと思う。

訪問先として学校、高校を訪問したかった。

タイの教育情勢をしりたかった。

(3) その他全般的の所感

先日の日本人襲撃、強盗事件は、私にとって大変なショックでした。なぜかという、このほんのわずかな一部の心ない人によってタイ全体のイメージをダウンさせてしまったことです。

職場の同僚達数人が今年の冬休みを利用してタイへ行ってみたいとのことで準備をし、また今回の私のタイ研修も情報提供ということで一翼をになっている所でしたが、残念ながらこの件で変更になりそうです。しかし、この残念な事件を私なりに思うとこの背景には、タイの人達が見る日本人は違った日本人を見ているのではないかと思う。この人達はアメリカやヨーロッパで同じ様な態度をとれるでしょうか。おごりや経済大国日本、お金持ち日本人と

して異様に映っているのではないだろうか。たしかに物価を考えた時、豊富な生鮮食料や生活必需品の安さは、日本の30年前の水準で比べものになりません。我々は今のお金で昔にタイムスリップしたような感じでした。そして日本人旅行者が安い安いと食べるタイの料理がタイの労働者の10日分の賃金であり、水がわりだと飲んでいるビールが農民の1日分の賃金である。これらを平気で飲み食いし、又、お土産だと言って高価な貴金属を買っている日本人の姿は異様としか映らないかも知れません。

日本人学校を訪問した時など「校内でのいじめの問題はありますか」との間に「はい、日本人同志のいじめはないのですが、時にはタイの子供をいじめることがあります。これは、多分家庭での会話の中に自然とタイ人蔑視があるのでは……、学校においても人権問題も取り上げなければいけないと個人的に思っています」と、答えられた。風土や文化の違い、経済力が違うからと言って人間性まで失いたくないものです。

出発まえ、タイでの旅行中、空港で、ホテルで路上で大変盗難が多いので十分注意するようにとのことであったが、私など幸になら事件に遭遇することなくかえってタイの人達に大変親切にされ感謝しているところです。このことも旅行者自身の問題であり不注意によるものが多く感じられた。タイ人をみれば泥棒と思えというような過剰反応は失礼ではないでしょうか。この問題についてタイの青年に質問した所、最近では難民が多いから気をつけて下さいとさらりと言われてしまった。

タイ東芝の方の話は大変興味深く印象に残りました。「タイで成功する方法は、私なりに考えると、現地での食物はなんでも食べられること、どこでも寝起きできること」と言っておられた。簡単なように話されていたが、気候風土、食生活や習慣の違う社会で働くことは、並大抵のことではないと思う。

チェンマイで日本語学校で日本語を教えている協力隊員でもある三浦さんに会うことが出来大変勉強になりました。特に知りたかったタイの先住民族の動向や、山岳民族についてわずかな時間であったが教えてもらい感謝しております。

市内で日本語学校に通い日本語を勉強しているという青年に会いましたが流暢な日本語と日本理解の深さに驚きました。又、日本をもっと知りたいという旺盛さにも感銘しました。この青年からも普段の協力隊の活動や人がらが自然と理解できます。

タイでの一週間様々なことがありましたが、大変素晴らしいものでした。タイの人達の若々

しさ、若者の目の輝き、礼儀正しさ、心暖かさ、日本人が忘れかけている宗教観、どれをとっても興味深く新鮮に感じられました。又、そこで働く日本人の人達、日本とタイ親善のため、日本の代表として苦勞されているJICAや協力隊員の皆様に感謝しております。一週間という短い研修でしたが、私にとって貴重な経験となり今後の教育活動に生かしていきたいとおもいます。又、今回の研修にあたって、お世話下さいました皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

氏名 高谷 純夫  
所属学校 富山県立富山西高等学校  
担当教科 社会科(日本史)

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

タイは以前シャムと呼ばれ、日本人にとっては「山田長政」の名でなじみが深い国である。高等学校の日本史・世界史の教科書には、アユタヤ王朝、山田長政の名前は必ず出てくる。

しかし、事前に世界史の教科書を調べたが、タイに関する記述は全部合せても1Pに満たない(370P中)。また、生徒の考え方の中にはアメリカやヨーロッパは学ぶべき点も多く興味・関心があるが、東南アジアは貧しく文化も遅れており、行ってみたいと思わないし、あまり学習したくないといった傾向が強い。

歴史的に見て、日本とタイのつながりは古代から現代に至るまで様々な面で関係が深い。教材化できそうな材料を集めてみたいと考えた。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

JICAそして青年海外協力隊員の苦勞と努力が身近に感じられたこと。

特に、隊員の「頑張り」には頭が下がった。対日感情があまりよくない状況(第2次世界大戦のことを非難、日本人は英語がへた、オートバイでケガすると「日本病」など)のなかで、「やめて日本へ帰ろう。」と何度も思ったという。それでもがんばっている。ある隊員は、「次の隊員に迷惑をかけたくない。意地でやっている。」と語ってくれた。その言葉の裏には、情熱と強い奉仕の精神があることを働く姿から感じとることができた。

### (2) 気になったこと

ア. 隊員の日本へ帰ってからの就職

イ. 国際協力を長い目で見ること……成果を急ぎすぎる

ウ. マスコミに負けない強い信念をもつこと

エ. メンタルな面の協力も大切

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

アユタヤ遺跡の旧日本人町に日本の援助によるアユタヤ資料館が建設される予定だが、技術協力もさることながら、文化協力も大切である。この事業を是非実現し、各方面に紹介してほしい。日本とタイとをつなぐ心の交流の場に必ずやなるであろう。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

日本史の教員として日頃から「歴史は過去を学ぶだけではなく、現在とのつながりの中で、未来を考えるために学習するのだ。」ということを指導している。

まだ、素案の段階だが次のような授業展開を考えている。

(1) 教科 日本史

(2) 単元 幕藩体制の成立と鎖国

(3) 題材名 日本人の海外進出 ― 特にタイを中心として ―

(4) 授業のねらい

17世紀初頭、タイで多くの日本人が貿易を中心とした諸活動に取り組んでいたことを知り、合せて現在の国際協力についても理解し、共に生きることを考える。

(5) 授業の展開

| 段 階 | 学 習 内 容   | 資 料  |
|-----|---|--|
| 導 入 | ・地図からアユタヤ、日本人町に注目する   | ・17世紀初頭のアジアの地図   |
| 展 開 | ・山田長政を中心とした当時のタイの状況について理解する<br><br>・青年海外協力隊、ODAなどの話を聞き、これからの日本とタイの関係について考える | ・スライド<br>アユタヤ遺跡<br>旧日本人町<br>・石碑の碑文<br><br>・タイにおける国際協力に関する資料（OHP）<br>・スライド<br>協力隊員の活動現場など |
| 整 理 | ・日本とアジアの関係の歴史を学ぶことの大切さを知る   |  |



## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

8月24日出発、8月30日帰国であったが、できれば出発を2～3日程度早めていただければ有難かった。

期間については適当であった。

### (2) 研修日程および訪問先

特に問題はなく配慮されていたと思う。

ただ、個人的な意見として、現地の学校訪問をしたかった。教育現場の実情、どんな援助が必要なのか、社会科の授業・教科書など視察できればさらに良かった。

### (3) その他全般的な所感

ア、わずか7日間のタイ国訪問であった。いろいろな物を見、人と交流してきたが、事前の勉強不足を先ず感じた。タイへ行ってしか聞けないことと、日本でわかることを区別しておく必要があった。

イ、これでタイがわかったわけではない。「タイはこうなんだ。」とすべてわかったような顔をして、人に話をしてはならないと思う。象の鼻をなでただけでは、象全体がわからないように……

ウ、日本人は自分の考えを押し付けることが多いのではないか。質問の中にも「日本ではこんなやり方をして生産を上げている。タイではどうしてやらないのか。」というのがあった。これは押し付けである。タイはタイの考え方があるのであるから、価値観の相違をまず理解しなくてはならないと思う。

エ、国際理解というのは、相手をまず「好き」になることだと感ずる。好きになった上で共通点を見出していく。そして「共に生きる」ことを考える。そんなことが大切なのではないか。

タイ……私は大好きである。

氏名 出丸久之

所属学校 三重県立津高等学校

担当教科 英語

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

青年海外協力隊の隊員や研究員の方々が、どのような活動をしてみえるのかを実際に目で見ることにより、小生のこれまでの「アジアへの眼」を強化し、生徒の指導に役立てようと考えました。また彼等の活動にどのような問題点があるのか、タイ王国の国民のものの考え方、行動の一般的な傾向はどういう風なのかも知りたく思いました。わが国が発展途上国に援助の強化を推進しているにもかかわらず、日本人の多くは欧米中心にものごとを考え、アジア諸国の近くの国々に目を向けることがまだまだ少ない。ODAにおける開発途上国への援助は増加の一途をたどっているが、その実状をタイ王国という具体的な国において知ることは、ひとつの例として大きな認識を小生にうえつけることになろうと期待もしていました。また、タイ王国は独立を保持してきた国として知られているのですが、その独立維持の秘密はどこにあるのだろうかという素朴な疑問も大きな主眼点のひとつでした。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

技術立国の日本の援助が研究所や大学の至るところに行き届いているのを見て驚いた。日本製の高度な機器が実際に使われ、今すぐには直接には民衆への投資にならぬとも、将来のタイ王国の特に農業、生産部門に大きな貢献となることが充分予想され、民衆への還元が少しずつ実現していくものと考えられる。特に農業分野での実績は超えるべき障壁はあるものの、生産性向上においてより多くの農民を啓発するものと考えられる。訪問したカンペンセンのカセサート大学やメジョー農科大学における隊員、研究員の活躍が、将来にわたってますますタイの農業資源の生産性向上に貢献していると思われる。

カセサート大学の研究所での現地農民との接触は、農民達が持ち込むサンプルに対する分析とそれに基づく解決策を教えることが主なようである。実際、資金が少なく、昔ながらのやり方が良いと考える農民達を新しいより合理的な生産性の高いやり方へと導くことは大変な苦勞のようである。タイ国民は自尊心があり、伝統や慣習を重んじるところがあるようで、改革には大変な苦勞が要ることと推察される。メジョー農科大学でやっている卒業生の土地保

有制度は、その欠点を克服しているようである。卒業生のうち専業農家になる若者たちがその土地を使い、習得した農業技術を駆使しより生産性の高い土地利用を実証しようとするものであり、これは効果を少しずつあげているようである。これら農業大学での技術指導は日本のお家芸でもあり、頼もしい限りである。タイ国民は個人主義的な傾向も強く、農業協同組合組織がなかなか定着しないとの事で、日本人のように組織的な行動をしないとのことも大いに参考になった。タイ国民が、どちらかという欧米諸国に近い傾向（多民族、多様性価値感、伝統による自信）があることも知り、驚いている。しかも日本に対して「星」という感覚を持ち、他の欧米人に対する割り切った考え方とは異なる態度を日本人に対して持っているようである。この点はこれからもこの国とつきあう時に心すべき重大なポイントだと考えられる。

他方、ODAとは直接関係は無かったが、東芝（タイ）工場を見学したことも大いに参考になった。工場長の小松氏はタイでの滞在期間が長く、タイでの企業活動の草分けでもあり、私共の率直な質問に充分解答をいただきました。タイを含め東南アジアの情勢もこの地にいる方から知りえたことは大きな収穫でした。

またカンペンセンの研修センターのチャチリさんのように日本で研修を積んだ人達が育っていて、プログラムの中心になって活躍してみえることを知りました。日本での研修を大いに生かしてみえることに感銘を受けました。これはチェンマイでガイドをして下さったチャチャイ氏にも通じることでした。彼は日本で養鶏について研修をし、今では1年の半分をガイドとして働き、観光のオフシーズンに山岳少数民族と共に生活をし、彼が日本で研修したことを生かしているとのことでした。このように、日本で研修を積んだ方々と協力隊の方々がスクラムを組んで仕事をより効果的にやっているようで、やはり人的資源は大切なのだと痛感しました。技術面だけでなく、日本で生活した経験から日本人の理解者をこれからも増やす必要が大いにあると思いました。

## (2) 気になったこと

各種の高度な機器が無償供与され、現場で使われているのを知り、日本の技術力の高さに誇りを感じました。カセサート大学での電子顕微鏡がフルに活用されていることも良い傾向でしょう。しかしこれら高度な機器類は一度調子が悪くなると、その修理費が大変だしアフターケアがあまり無いようでした。ODAで援助する時にその維持費も含めてできないものでしょうか。日本国内だったら全国ネットで充分その機器の修理等可能ですが、タイ王国にはそれだけの予算も無いようです。高価な機器がほこりをかぶっている場合もあるのではと

心配しました。

次に人的資源に関するのですが、協力隊の方々は、20~30代の人々が多いようです。多くは会社をやめてこの仕事に打ち込んでいるようです。協力隊でもっと若い人々、例えば20代前半、高校卒程度の若者が増えることが望ましいように思います。現場での仕事はきついようで、どうしても独身の人たちとなりますが、28・29才ともなってくると再就職や結婚のことで大変だろうし、30代ともなると、結婚し子供もいるという状態になってくると考えられます。年令が上昇すれば、社会的経験も豊かになりますが、20代前半か10代後半の好奇心旺盛な若者が海外の人々と働くことにより、日本の青年たちの国際化が本当に進んでゆくのではないのでしょうか。そういう若者達を高校段階から募り、奨学資金等の特典を与えて養成していく必要があるように思いました。現地で働いている協力隊の人達は、案外将来に対して楽観しているようでしたが、小生にはそのようには感じられませんでした。より若い人達だったら、その経験を大いに生かして就職し、できれば海外との接触ある仕事に就き、今より長い期間を、日本にとってより多くの海外への窓となることができると思いました。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

直接JICAのタイ事務所の方にお伺いするのを忘れた事項があります。JICAがどんな活動をやっているかということは「国際協力」誌でよくわかります。しかし、現地で実際に日本の協力隊員がどんなことをやっているかをその現地語で各種方面、特に中学校レベルの若者達に知らせてみえるかどうかということです。特に農業立国としてのタイ王国の民衆にとって日本の農業技術がどんな風に役立っているかをタイの若者達に知らせることにより、これからの日本とタイ王国との関係をよくすることになることと思われます。すでに実施してみえるなら、きわめて具体的な例でPRされると効果的だろうと思われます。

いろんな地域で各種の工夫をされている隊員の独創性を紹介されることはとても有意義だし、その隊員の励みにもなることと思います。例えばチェンマイ大学の柳井隊員が、繊維化学の研究室で学生が論文を書くための諸実験施設というか装置を自分で工夫され作ってみえた。いろんな現場でこういうことが多く行なわれていると考えられますが、こういう記事が若い人達の好奇心や想像力、創造性をかきたてることと思います。このような記事は管理社会「日本国」より自由を求めてゆこうとする若者にもアピールすることと思います。そして将来、もっと多くの協力隊員が異文化の中で、苦勞しながら創造力を高めることと思います。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

どれぐらいの数の生徒達が参加してくれるが全くわからないのですが、やはり論文参加をてこにして開発途上国へも生徒の目を向ける必要があることと思います。最近の若者は格好良いことや楽なことしか考えないようで、なかなか文章を書こうとしないし、欧米文明以外の方面に目を向けようとする傾向が強いようです。行きたい国には欧米先進国がずらりと並びます。こういう面で小生がうけたいろんなカルチャーショックは、やはり欧米に行ったときより今国のタイ王国で大きかったように思います。まだ日本に根強い「外者」「内者」という観念、すなわち「外国人」と自分達を区別していることです。しかし膚の色が同じだったらどうでしょうか。同じような膚をし、日本人とまちがうような人々のいるタイ王国に行って、自分が「外国人」として見られているという感じを受けました。その苦痛は想像以上のものがあります。口には出ないものの、その何とも言えない強迫観念には閉口しました。とすると、日本にいる外国人の気持ちがわかるような気がしました。これは欧米などであまり感じたことのない体験でした。ニューヨークのホテルなどにいると、アメリカ人とまちがえられて、いろんなことを聞かれたことがあります。だから自分が外国にいて「外国人」という感じを持ちませんでした。しかしタイ王国では「ただ金を持っている兄貴分」としか日本人を見ていないことに注意させるべきでしょう。

日本人の一般的な考え方の2つ目の点として、ひと頃は欧米が各方面に渡り進んでいると考え、欧米の科学技術を中心に日本人は吸収して来ましたが、しかし最近では日本は世界一だと考える人達も出て来ています。ましてやアジア・アフリカ等開発途上国諸国は、欧米よりもはるかに後進地域であると考えられる人々も多いようです。すなわち、アジア諸国を日本より劣った地域であると考えられることです。確かに一部の科学技術等で日本は先進国のひとつでしょう。しかし日本の社会よりも合理的に活動している部分もその国々にあるはずですが、タイ王国へ行くまで、その国が仏教徒の国であることしか知りませんでした。しかし諸民族が交流し、異文化に対する寛大さや西歐的個人主義などが発達しているのを垣間見て、日本より進んでいると思いました。また最近姿を消しつつある「礼儀」作法がこの国ではいろんな場で生きていました。こういう面のカルチャーショックを、タイ王国で体験するとは思いませんでした。これからは日本も日本人だけでなく、諸民族と交流を続け、国際結婚をしながら、門戸を開いてゆくことになるだろうとこれまで頭の中で考えていましたが、タイ王国のダイナミックな民衆の活動を見て少しずつ日本もタイ王国のような状況になってゆくだろうと実感しました。またタイ王国の日本に対する寛大な考え方には多くの要素、特に国益がからんでいるようにも思いました。そこにタイの政治家の先見の良さを感じました。バンコクの日本人学校の経営に関する施策は信じられないほどでした。このようなものの考え方をまとめてしまうとまずい点もあるかも知れません。しかし東南アジアの不安定な

国々の状態の中で、タイ王国が独立を保持してきた外交のうまさがかがえます。これはやはり日本が学ぶべき点でしょう。日本の外交の路線を敷くのに参考になる点があるように思いました。こういう点を授業の中で教材にあわせて紹介してゆこうと考えています。

## 5. 所感および意見

短い1週間のタイ王国滞在でしたが、多くを学ぶことができましたことをJICAの方々の並々ならぬ御努力のおかげと心より感謝しております。小生はこれまで欧米諸国を数回に渡り訪問しましたが、アジアの国は初めての体験でした。これまで生徒達に日本が隣近所の国々を大切に、発展途上国のことを考えるよう導びてきました。しかしそれは生徒はもちろん、小生にとり観念的なものでした。そして毎年行なわれる論文には海外へ行ったことのある生徒さん、裕福な御家庭の子女や頭の良い留学体験のある高校生が上位を占めていました。その海外体験のある優秀な生徒さんがまた海外へ出かけるチャンスを得るのをじっと見ていました。海外に行ったことのない小生の生徒の多くにとって「海外のこと」は観念にしかすぎないのです。それを生れてはじめて考えたと言っている生徒の多かたことに驚いていました。<sup>\*</sup> やはりそのような観念の中にしかない「海外」「国際協力」を高校生にも実際に体験してやる必要があるんだなあ、感謝の念と共に、希望する次第です。三重県ではせめてその子達に報いるために知事賞を10人分毎年出しています。今、すべての高校生に「海外」とは何か、日本人にとって遠くの人々との交流とは何かを考えさせることが急務です。身近かな幸福は実は多くの海外の人々の血と汗の結晶であることは一杯の「えびてん」でよくたとえられます。それ程身近かに「海外の諸国」があるのに若い人達も大人達もそのことを考えようとしません。私達教師はその点で実に大切な存在です。JICAの今回に始まる大規模な教師派遣は非常に有意義なことと思います。但し安全性故にか大都市に滞在するのはあまり好ましいことではないと思います。出来ましたら、大学の研究所や大学の寮とかゲストハウスに滞在してなるべく田舎を回るようにして欲しいものです。ホテルは便利とは思いますが、あまり良くないのではと感じました。多少とも実現しそうな要望と共に、もう一度、今回の派遣を心より感謝する次第です。なかなか形には表現しにくいと思いますが、教育現場で機会を見てこの体験を生かしてゆきたいと思ひます。

<sup>\*</sup> 前任校の三重県立久居高等学校では過去4年間(この4月の応募を含め)毎年、新入生405~450人及び3年英語コース40数名にJICAの懸賞論文を書かせ、校内選考をして70~80点応募してきました。この4月の分は転勤しましたので、詳細を聞いていません。

氏 名 須 藤 武 彦

所属学校 京都府立農芸高等学校

担当教科 農業（造園）

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) バンコク・その他の都市における都市計画・都市緑化・観光計画について。
- (2) タイ国の造園教育について。
- (3) 青年海外協力隊の活動状況について。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

タイ国においては、都市計画・都市緑化について未発達でありマスタープラン等はないように思いました。

私は造園の教師として、今後造園技術者の必要性を強く感じました。

### (2) 気になったこと

日本においてタイ国が正しく理解されていません。例えば、治安衛生面においても、日本に比べ大差はないように感じられました。

現場では大規模な設備・備品については、ある程度援助されていますが、ぜひ必要な細かいものや、過去に援助されたものの修理や改造についての費用や技術が不足していると感じました。

現在、活躍している協力隊員が、期間を終えて帰国した後の後継者との連携がうまくいくか不安を感じました。

## 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

協力内容のうち、現地農村・その他の産業現場で活躍していることはテレビ・雑誌等によく紹介されているが、大学・専門学校などの教育機関での地道な研究・教育が、何代にも渡り受け継がれていること、またその教育機関で学んだ現地の若者を通じて、日本の技術・知識が浸透して来ていることは、ぜひ各方面で紹介して欲しい内容です。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の研修において、チェンマイの Mjyo Institute of Agricultural Technology で、施設やわが国の援助について見学した時、幸いにも Landscape Planning の授業を見学することができました。

その内容は、私が高校において、2年生で教えているのと同じであるバーステクニクでした。そのとき案内していただいた協力隊員の方に、担当の教授の紹介を依頼し資料の交換を約束してきました。

日本庭園・日本における都市緑化・自然保護についての資料を交換したいと考えています。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期及び期間

時期は、あと2～3日早い時期にしてほしいです。期間については今回の通りでよいと思います。

##### (2) 研修日程及び訪問先

研修する内容が見学中心であり、体験的な研修がなかったです。また、視察先も、現地隊員の活躍している現場（農場・農村・工事現場）をより多くしてほしい。

##### (3) その他全般的な所見

青年海外協力隊事業について

隊員の派遣職種は、多数あるが農林・土木部門は中でも中心的部門と考えます。

私は、現在農業高校の進路指導部に属していますが、毎年数名の者が、1年生から協力隊を目指しながら3年生になってあきらめています。

その理由は2つあります。

1つは協力隊除隊後の就職であり、これは近年改善されてきています。

もう1つは、学歴は応募条件に入ってはいませんが、生徒は入隊のため、より高度な知識・技術を目指し大学進学を希望します。しかし、家庭の経済的理由により、大学への進学をあきらめ、同時に協力隊もあきらめるのです。

私の希望として、このような生徒のため協力隊希望者対象の奨学金制度を、ぜひお願いしたいと考えます。



氏 名 柴 田 和 三  
所属学校 兵庫県立神戸甲北高等学校  
担当教科 英語

#### 研修内容

- (1) JICAが実施している国際協力の現場視察
- (2) 移住者、日系人等の活動現場視察
- (3) タイの産業、社会、教育事情等

#### はじめに

JICAの協力により平成元年8月24日より8月30日までの7日間タイへ派遣され、我が国のタイに対する経済、技術協力、特に、JICAから派遣されている青年海外協力隊員あるいは、無償資金協力による施設で働く専門家等の活動状況を視察し、あわせて、タイに進出している日系企業で活躍している人々の活動状況、そして最後に、タイの産業、社会制度、教育事情等を考えながら、私が実際に見たこと、感じたことについて少し触れてみることにより、タイと日本との国際交流がいかにあるべきかを考察し、日本人として国際理解をさらに深めていきたいと思いを。

- (1) JICAが実施している国際協力の現場視察  
(専門家、協力隊員の活動、無償資金協力による施設等)

#### タイ・カセサート大学研究協力視察

協 力 期 間 : S. 62. 4. 16~H. 3. 4. 15

所 在 地 : タイ・ナコンパトム県 カンベンセン中部

先方関係機関 : 大学庁

我が方協力機関 : 文部省・農林水産省

目 的 内 容 : タイ国農業教育の最高機関であるカセサート大学の総合研究センター、農業機械センターにおいて、研究能力の拡充を通して、農業開発に寄与することを目的に、以下の研究を行なう。

- 1) 作物改良のための生物工学と育種
- 2) 農業環境と品質保証技術
- 3) 農業機械技術

タイ中部、ナコンパトム県カンペンセン（バンコクより西北80km）にあるカセサート大学における日本からの研究協力について視察を行なった。

まず感じたことはさすが日本の1.7倍の国土をもつタイという国がらだけあって、大学のキャンパスが非常に広く、キャンパス内では単車に乗った若者が客を後ろの座席に乗せ、タクシーのかわりをしているおもしろい光景に出くわした。この大学の建物及び機械は、全て日本からの協力援助のもとに成り立っていて、建物の名称は英語で書かれていたので、私には非常にわかりやすかった。この大学の学部長さんが、大学の研究施設、内容について英語で細かく説明されたが、専門的な内容も多くあり、わからない部分もあった。農業技術普及のため、器具は全て日本から導入されていて、例えば、電子顕微鏡やコンピューター等もよく活用しているとのことであった。また、トラクター等の農業機械が日本から導入され、農業機械技術普及のため、日本から派遣された専門家が指導にあたっていた。専門家の話によると、農業の機械化はまだ遅れていて、稲刈り等は依然としてほとんどが手作業で行なわれているとのことであった。一つには機械を購入するよりも、手作業で稲刈りをするほうが安くつくことと、購入後、故障すると修理するのに何か月もかかり、故障のまま放っておくか、あるいは、しまいには捨ててしまう結果におわることも多いそうである。タイは東南アジアのなかでも気候的に恵まれ、水も豊富で、野菜や米もよく育つそうである。米は二毛作で、不思議なのは、一方で稲刈りをしているのに、同じ時に、その隣では田植をしているという珍現象が見られる。最近では農業に従事するものの労賃が1日50バーツ（約300円）という低賃金であり、多くの若者は、バンコクへ出稼ぎに行ってしまうので、農家の後継者が減少しているとのことであった。

#### メジョー農科大学（小暮隊員）を訪ねて

学生数1,200人、教員120人ほどの大学である。日本からの協力隊員、小暮氏はグリーンハウスにおける植物、野菜栽培のために最も有効的な温度調整のしかたについて、コンピューターで、プログラム化し、指導を行なっていた。この大学では、造園学部および農業生産学部の二つが非常に有名である。実習時間は約200時間ほどで、卒業後90%が就職し、5%程が自営業につくそうである。農業の機械化を推し進めるために、高度な農業技術をもった学生に卒業後、政府は無償である一定の土地を供与している。それは、その専門技術をもった人が近隣の農家の人々に農業機械技術を指導し、その技術の普及を狙いとしたものである。

#### チェンマイ大学（柳井隊員・繊維化学）を訪ねて

セラミックおよび繊維化学に関して、柳井隊員が指導にあたっている姿を見せてもらった。私は専門知識がないのであまり解らなかったが、石油化学に関する専門家はまだまだ不足し

ているそうである。

## (2) 日系人等の活動現場視察

### タイ東芝を訪ねて

タイ側51%、東芝49%の出資により、1969年に日本からタイ東芝として進出している。主に扇風機、冷蔵庫、テレビを生産している。大阪本社より7名が、タイ東芝へ出向し、活躍している姿に触れてみた。進出動機を聞いてみれば、輸出外代型の生産基地をタイへ持っていった形をとっているそうである。部品を日本から輸入し、完成品をアメリカ等へ輸出する形をとっている。訪問した時は8月末ということもあって、米国向けの扇風機の生産は終って、タイ国内向けの生産に切り替えているとのことであった。生産競争力について、日本と比べてどうであるかと聞くと、いかに社内教育がなされているかによるものであって、現在のところ、生産競争力は、日本と殆ど差がないとのことであった。

現在NIESと呼ばれる国は韓国、台湾、シンガポールで、その次にタイ、フィリピンが頑張っている。タイ東芝の日本からの出向員の話によると、タイはこの2~3年の間に近代化が急速に進み、タイ国内で2つの国があるといわれているほど地域差があり、GNP国民一人当たりバンコク市内では平均\$2,700で、その他の都市へ行くと\$900程度(東北タイでは\$400)とさわめて所得が少ない。タイは現在インフレの状態で、経済成長率は10.6%である。タイ東芝へ就職してくる者の多くは高卒で、技術を持った大卒は取り合いで、給料も非常に高い。日系企業に対する人気度は極めて良好で、日本に対する悪感情はないようである。タイの人々は全般的に日本人より英語をうまく話せる人が多いようである。タイの企業は日本と違って終身雇用制度をとっていないため、せっかく社内教育で教えたものが蓄積されずにつぶれてしまうという難点をもっている。能力のあるものは高給を求めて転職する者も多くいるそうです。最近日本から多くの企業が進出してきており、それにつれて、組合も多く結成されていて、タイの人々と日本人との間で、少なからず摩擦も生じている。

### タイの日本人学校を訪ねて

日本人学校の教師と会い話を聞いたが、資格は文部省委嘱による文部省嘱託員として派遣され、現地では外務省の嘱託員として勤務している。昭和49年秦日協会学校として発足している。タイの法律により、外国人が独自に学校を開設できないため、校長はタイ側1人、日本側1人の計2名になっている。日本から来た教師は、タイの教員免許状が必要で、2年以内に試験を受けて教員免許を取得する義務があるそうである。生徒はタイ語を週に2時間、英会話も週2時間学習している。その反面、日本語の国語力が低下しているようだ。帰国子女

に関し、多くの問題をかかえているようである。タイでは法律上、塾が開設できないため、学力が伸び悩んでいる生徒も多い。又、進路に関し、情報が少なく、受け入れ校でもそれぞれ制約があり、親が帰らないと受け入れてもらえない等の帰国子女の問題をかかえている。

### (3) タイの産業・社会・教育事情などについて

タイ東芝の工場を視察して感じたことだが、全般的にまだまだ機械化が遅れていて、手作業によるところが多くあると思う。一つには労働賃金が非常に低く、機械を購入するよりも手作業でやるほうが安く出来上がるからだそうだ。その他の産業を見ると繊維製造業が圧倒的に多く、絹製品も多い。タイはここ2～3年の間、非常に高い経済成長をとげていて、インフレの状態にあると言われている。多くの若者が新しい仕事を求めて大都市のバンコクへ集まり、タイの総人口5,500万人のうち、バンコクの人口が560万人にも達しており、毎日ひどい交通渋滞に悩まされている。その結果、タイ国内で、バンコク市内の住民と地方の住民との所得格差が生じている。これは一つには日本の企業がこの2～3年の間に、急激にバンコク市内に進出しており、日本からの投資率も220%と非常に高い伸びを示している。そのためバンコク市内では建設ラッシュが続いている。

タイという国は仏教国であり、今までに植民地になっておらず、緑と水も豊富にあり、食料危機に直面することもなかった様である。タイの教育について、聞くところによると、小学校までが義務教育で、そのあと中学校から勉強したい者だけが就学するそうで、日本と違うのは能力のある学生は、早く卒業できる飛び級の制度がある。又、日本の教師と違う点はといえば、仏教国でもあり、教師は非常に尊敬されていて、あることについて授業を行なうと教師は、生徒にあまり考えさせずに、答えまですぐ教えてしまうそうである。その点、日本はアメリカとタイの教育の中間点を通っているのではなかろうか。タイは王様の国で、大学の卒業式に、王様が学生に卒業証書を渡している。タイは英語教育に力をいれており、日本の生徒に比べて、話す英語は進んでいる。又、社会に出て英語ができれば、優遇されている。タイ国民は90%以上が仏教徒であり、金持ちと貧乏人との差が大きい、それについて、国民は変革を求めようとしない。もちろん日本のような高率の相続税を払わなくてもよいこともあって、貧富の差はなかなかちぢまることもない。

タイは緑と罰の国といわれていて、王様の権限が非常に強い。又、内務省の力も非常に強力なものあって、警察権力も大変、しっかりしている。タイ語はさっぱり分からないので社会制度について詳しく分からないが、企業は土曜日が休みであり、週休二日制をとっている。以上、教育・社会面を見ると、欧米の制度を多くとりいれており、タイの国民は外国からの

ものを受け入れる柔軟性に富んだ国民であると思う。

日本とタイの関係を見ると、経済的に結び付きが非常に深く、タイは日本の投資を歓迎しており、友好関係にある。又、日本はタイに対して、JICA等を通して、農業・工業等の経済技術援助を行なっている。タイ全体の経済を考えると微々たるものであるが、このような今までに行なわれてきた経済・技術援助により、タイの現在の経済成長があると思われる。しかし一方で、タイの国民は日本及び日本人についてあまり知っていないし、又、日本人もタイのことをよく知っていないと思う。聞いた話であるが、タイの人は日本人に対して何か複雑な感情を抱いているとのことである。同じアジアにいて日本は経済的に豊かになっており、タイの人が歌米人を見る目と日本人を見る目が違うそうである。同じことが日本人にも言えるのではなかろうか。

これから真の国際交流を深めるためには、今までの経済・技術援助にとどまらず文化・教育面での人的交流をもっと深めていく必要があると思います。その意味で、JICAから派遣された青年海外協力隊員は、各専門分野の指導にとどまらず、タイの人々に溶け込み、タイの政治、経済、文化といったあらゆる面を理解すると同時に日本の文化や社会制度などを紹介もしている。今後もこのような青年海外協力隊員を増やしていき、又、タイから日本への研修生あるいは留学生をもっと受け入れていく必要があると思います。

それから、最後に、JICAの協力で一週間タイを視察でき、非常に感謝しています。この経験を活かし、今後も国際理解を深め、この国際社会で活躍できる人材を育成するべく努力していきたいと思っています。

氏名 小林 秀之  
所属学校 岡山県立高松農業高等学校  
担当教科 農業

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

国際協力事業団（JICA）の御好意によって今回の海外研修に参加できました。タイ王国は初めてですので、特に

- (1) タイ王国の農業の現状と将来性及び日本農業に対する影響
- (2) 政府開発援助（ODA）はどのように使われているか
- (3) 現地の人々が喜ぶような援助が行なわれているか

の3点を特に知りたいと思いました。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

外国では、日本の常識がなかなか通用せず、各国ごとの事情があることがよく解りました。7日間の研修旅行でしたが、我々を乗せるバスが約束の時間よりも90分も遅れてくるし、ガイドが道を知らず、通りがかりの人に何回も尋ねて、やっとこさ目的地に着いたりしました。たったこれだけの体験ですが、私は歴史や文化や政治体制や天候や言葉その他すべてが日本と異なる外国では日本流の「尺度」は通用しない場合が多いと納得しました。

### (2) 気になったこと

最近、新聞などでODAを批判する記事が目立ちます。私は「ODAの成果が100%実を結ぶ国があるのだろうか？」と考えてしまいます。

現在の日本でも、福祉行政一つ取り上げても末端まで公正に施行されているようには思えません。まして開発途上国の政府に対して日本と同じ行政レベルを要求する方が無茶であると思います。（各国の政府については、各国の実状に応じてベストの政府が作られている筈ですので、私は日本の尺度で各国政府を評価するのは正しくないと言いたいです。）

又、現地有力者の協力が無ければ最初からつまづいてしまうと思われます。リポートの問題でも、日本では許されぬ行為であるが、その尺度をすべての開発途上国に期待するのは非現

実的であると思います。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

最近の新聞では、ODAの失敗例として、故障したままの機材、稼働率の悪い設備、活用されていない医療機器などがやり玉に上っています。ところで、日本国内では、そんなことは皆無なのではないでしょうか？

開発途上国では、義務教育でさえ終了していない人が少なからず存在し、高等教育、大学教育を受けた人は限られていて、少々講習を行っても日本のようにはいかないことをJICAは主張すべきだと思います。日本のように働きバチで残業も当り前の国と、定時には仕事を止めて、副業や家庭サービスに精出す国とでは比較にならないと思います。

カセサート大学とその研究、研修設備は内外に紹介すべきだと思います。ODAの根本方針を、第1に各国の教育水準の底上げ、第2に基幹産業の育成、第3に医療水準の向上、に絞って、内外に表明したらどうでしょうか。

キメ細かいアフターケアというのは限られたワクの中では大変困難であると思います。JICAも自己主張をするべきであると思います。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

私は外国の話をするときは、日本流の尺度を捨てて、実状を見るべきだと話しています。

経済援助については、『相手国の発展に役立つ援助』を基本とするのは当然だが、主権を有する各国政府の行政能力や実際にODAの設備器具を使う人々の活用方法が、日本人から見ても不十分であったとしても、批判するのは妥当ではないと教えています。

『援助は不要だ。』という意見に対しては、「経済観念の無い国に対しては多分無駄になるであろうが、地球の安定と平和に対する保険として、ODAは必要だし、村一番の金持は祭りの寄付を一番多く出さないといけないではないか。」「タイの様にODAを活用して経済発展してくると、難民も出ないし、日本製品も購入してくれるようになる。情は人の為ならず。アインシュタインの一般相対性理論なんだよ。」と答えております。

勉強嫌いの生徒がタイの話をしてくれと授業中要求するので、少々困っています。

### 5. 所感および意見

研修時期をもう半月程早めたらいいと思います。研修期間は10日位でもよいと思いました。

研修日程は訪問先も含めて、かなり余裕が必要だと思いました。次に班分けは西日本と東日本に分けて、西日本は大阪から搭乗できるよう希望します。国内旅費も結構かかりました。

私の大学時代の先生方2名も（岡山大学、岩佐教授、河津教授）同じ時期に、JICAでケニアとマレーシアに派遣されました。各国の様子を直に聞けるのが楽しみです。

最後に同行して頂いた、木下さん、山田さんには深く御礼申し上げます。今後も田舎住いですが、国際交流に少しでも役立てる人間になろうと考えています。



氏 名 山城 俊 一  
所属学校 愛媛県立内子高等学校  
担当教科 社会

1. 視察等に際して特に注眼をおいた点

- (1) タイ国民の生活水準
- (2) タイ国に対する日本の援助の現状
- (3) 青年海外協力隊の実態

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

多額の援助や高度な技術もさることながら、JICA職員並びに青年海外協力隊員の職務を越えた誠意と熱意・信念と執念には強く感動しました。「物から心へ」と言われて久しい今日、その事を実践しているJICA一同に確かな手ごたえを感じました。

(2) 気になったこと

- ア. 青年海外協力隊除隊後の再就職問題
- イ. 対発展途上国援助に対する日本人の認識不足

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

(設問の趣旨からそれるかもしれませんが) 日本人学校・日タイ合弁企業・タイの日本人社会など、技術よりも人の面にライトをあてて我が国に紹介すべきだと思う。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 発展途上国から中進国へ脱皮しつつあるタイ国の現状
- (2) タイ人と日本人との考え方の違い(異文化理解の初歩)
- (3) 青年海外協力隊の実態

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期及び期間

ア. 時期は8月初旬を希望しますが、貴団の年間行事との関係もあると思いますので、無理は言えません。

イ. 期間1週間はあらゆる面を考えた場合、実に適切だと思います。

### (2) 研修日程および訪問先

適切だと思います。

### (3) その他全般的な所感

ア. 派遣決定を早期にお願いしたい(6月中)

イ. この度のタイ研修旅行は、現場の教員として、また一人の日本人として大いに考えさせられるものがあり、大変勉強になりました。海外旅行が日常茶飯の事になったとはいえ、一地方公務員にとってまだまだおいそれとは実行できないのが現実であります。そのような中、良い機会を与えていただけたと感謝しています。とりわけJICAの木下建様、山田毅久様には同行していただき大変お世話になりました。紙面をかりてお礼申し上げます。

以上

氏 名 待 鳥 順 二  
所属学校 福岡県立八女農業高等学校  
担当教科 農業

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

私は、今回国際協力事業団（JICA）の主催する海外研修（タイ国班、日程、平成元年8月24日～8月30日）に参加できたことは本当に幸運であった。参加が決まったときは、タイ国の産業や社会情勢等を生徒達に話してやればよいと安易な気持ちでいたが、JICAから送られてくる資料に目を通すとJICAの事業内容、役割等をあらためて学び、また今回の研修目的がわが国の国際協力の現場や実情を視察する事により、生徒へ国際理解教育の還元を行なわなければならないとのことで責任の重大さを痛感した。

最近、新聞でも問題になっているが、わが国の政府開発援助（ODA）は年間1兆3千億円にも及び、世界1位になろうとしているが、残念ながら国民には、その実態はあまりよく知られていないようだ。本研修では、JICAが行なっているプロジェクト技術援助の見学や、専門家、協力隊員との懇談が予定されていた。私は、自分の目で見、現場の声を聞き一部報道されているようなODAなのか自分なりにこの問題を考えてみようと思った。

## 2. 国際協力の現場で

### （1）カセサート大学

この大学は、JICAが援助しているプロジェクト方式技術協力の一つであった。無償資金援助の建物、実験器具、機械類の見学を行い、現地の派遣専門家から説明を聞いた。カセサート大学は、農業の専門大学でタイ国内では、レベルの高い研究を行っていた。プロジェクトの内容は、トウモロコシ、パパイヤの無菌苗の培養や、稲、野菜の育種のバイオテクノロジー、貯蔵輸送技術研究、農業機械化技術の開発が中心であった。研究開発内容はわが国でもレベルの高いもので短期専門家として派遣されるのは、大学の教授クラスのかたたちだそう。

稲の品種改良など生物工学関係は、かなりの成果をあげ現地での評価も高いものがあった。農業機械化技術の開発もすばらしいものであったが、専門家から問題点を聞いた。それは、タイ国の一戸当りの米の平均作付面積は1ヘクタールで農家の収入が低いこと。米1kg=約

55円。湿地帯が多いこと。稲の品種が40種あり草丈が不揃いのこと。これらの要因が機械化を遅らせている。また、日本の農機具をそのままでは使用出来ず改良の必要があるということであった。

#### (2) メジョー農科大学、チェンマイ大学

メジョー農科大学で青年海外協力隊員の小暮氏の活動視察とお話を聞いた。小暮氏は、大学で農業機械科の講師でコンピュータを教えられていた。彼の話によると学生達はコンピューターには興味があるが、数学等の基礎学力が想像以上に低く、ハード面の講義は理解してくれない。トランジスタラジオの作成をやってみようと考えているとのことであった。

チェンマイ大学では、繊維化学を教えられている柳井氏にお会いした。彼は、卒論の指導もされていて大学からも期待されていたようだ。

二人とも自分の仕事に自信をもち、はつらつと頑張っていた。

#### (3) 日本人学校

タイ国の日本人学校は、世界中にある日本人学校の中で唯一その国が認可した学校で、日本でいう私立学校に相当するものであった。全校生徒は、小学、中学部を含め1297名、教員73名(タイ人含む)、校舎は鉄筋4階建てのりっぱな施設であった。タイ語が2単位の必修で英語は、タイ人教師がおこなっていた。生徒指導面ではほとんど問題点はなく、帰国後の高校進学が生徒、父兄、学校の三者の悩みだそう。

#### (4) JICAタイ事務所

JICAタイ事務所では、斉藤所長、加藤次長からタイの状況、協力実情をくわしくお聞きした。問題点をあげると援助金額は、日本が1位だが有償資金(OECF)が多いこと。人材の派遣が金額と比較すると少ないこと。企業や個人の利益につながることは、民間セクターの技術援助が望ましいことなどが考えられる。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回見学予定の労災リハビリステーションセンターが時間の都合で見学できなかったことは残念だったが、ひろくわが国民にアピールするものは、このような不特定多数の人々に利益をもたらすようなプロジェクトのほうが理解を得易いように思える。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今や世界中に及んでいるわが国の経済援助、経済大国になったわが国のこれからの役割等を少しでも生徒に理解させなければならない。そのためには、ひと月に1回の特設授業だけではなく、一般の授業の中でもこの体験談やスライドを活用し、国際理解ができ、将来国際社会に対応できる人格を育成させることを常に心がけながら教育活動しなければならないと考える。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

夏休みで学校にも迷惑をかけることなくよかった。期間も1週間ぐらいがよい。できるならば8月の28日に終わると少し余裕ができると思う。

##### (2) 研修日程および訪問先

バンコクは、想像以上に車が多く、交通ラッシュで予定の時間を遅れることが多かった。しかし、日程には無理はなかったと思う。

訪問先はできるならばもっと奥地でのプロジェクトや協力隊員と会いたかった。

##### (3) その他

バンコク市内でのバス移動で日本語ができるガイドを雇ってもらいたかった。名所、旧跡を通ってもわからなかったことは残念である。

しかし、今回の研修は全国の先生達とも顔見知りになれたし、なによりも生のODA、専門家や協力隊員の方達ともお会いできた。そこには連帯感、活気、情熱が満ち溢れていた。すばらしい体験と感動を得た。

最後に御同行いただいたJICA職員の本下氏と山田氏には、ご心配をおかけ、またいろいろとご配慮を頂き本当にありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

氏 名 鎌 浦 誠 一  
所属学校 熊本県立玉名農業高等学校  
担当教科 農業（造園）

### 1. はじめに

国際化の時代といわれる今日、外国の文化、風俗、習慣やものの見方、考え方など国際的視野に立って理解し、相互の発展向上に努めることが重要視されています。

国際理解に努め、国際社会に貢献できる人間に成長するようにと願いつつ授業のなかにとり入れています。しかし、私自身外国研修の機会がほとんどなく、絶好のチャンスと思いこの研修に参加させていただきました。

多くの収穫を得て帰国し、国際理解教育の必要性を一層強めました。簡単ですが概要を報告いたします。

### 2. 研修日程

- 8/24 (木) 成田 → バンコク
- 25 (金) カセサート大学 JICAタイ事務所
- 26 (土) 王宮、ワット・プラケオ、アユタヤ遺跡
- 27 (日) バンコク → チェンマイ 市内見学
- 28 (月) メジョー農科大学、チェンマイ大学
- 29 (火) バンコク日本人学校、タイ東芝
- 30 (水) バンコク → 成田

### 3. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 国際関係の重要性について考える
- (2) 国際協力の現場、実情を見て今後の教育活動に生かす
- (3) JICAの協力事業について知る
- (4) タイ国の社会、経済と今後の産業動向について
- (5) 農業と農業協力の今後の方向について
- (6) 仏教の歴史と伝統にふれ、寺院や遺跡を訪ねる
- (7) 近代化しつつあるバンコク市の都市計画、緑化事業の普及について

#### (8) 交通、環境問題について

以上のようなことを主眼に置き研修にのぞんだ。

#### 4. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

##### (1) カセサート大学

###### 総合研究センター、農業機械センター

タイ国農業教育の最高であるこの大学は、広大な敷地の中に、総合研究センター、農業機械センターがあり、研究の強化充実のため、施設設備の技術協力がなされていた。

総合研究センター研究の力点として、(1)組織培養、(2)耐病性品種の開発、(3)品種改良、(4)作物の品質保持、(5)地域農業への対応など、バイオテクノロジーをはじめとした進んだ研究が行なわれ、タイ国農業の先進的基地となっていることに驚くと同時に、農業振興に寄与するものと思われた。

また農業機械センターも専門家の方々の努力でタイ農業にマッチした農業機械の試作研究が行なわれていた。

特に、(1)田植機の改良、(2)トウモロコシのカビ防止、(3)サトウキビ収穫の合理化、(4)脱穀機の改良、簡素化を重点に工夫をこらした研究であり、日本の技術援助の一環を見ることができ参考になった。

気になった点として、大学まで行く途中、農業の現状を車窓ごしに見たが、稲作中心の日本から見れば粗放的な農業形態で、家族労働的な面が強く、機械化もままならぬようである。そのようななかで先端技術を応用した農業が定着するまでには、長い年月がかかるであろうと思われる。

作物の品質向上については、気候、風土など種々の条件が整わなくては難しいことだろう。農業機械の地域への普及はまだまだ時間がかかりそうである。

貧富の差が激しく、農業機械まで追いつかないというのが現状のようであるが、機械化が進み、集約的農業が定着すれば日本は驚異となるであろう。しかし長い間培われてきた国民性もあり、早急な改革はできないのではないか。

日本からの多くの施設、機材が供与されているが、メンテナンス、あるいはアフターケアの問題が気がかりであった。

##### (2) メジョー農科大学

農業単科大学で、農業関係学科を多数有し、協力隊員は、電子機器専門の方が、温室のコンピュータ制御プログラム作成のため派遣されていた。

ここでも先端技術を導入した農業教育に取り組む姿が見られ、また教室では、私と同じ専門で造園学の講義がっており、興味深く参観させていただき、学生の熱気ある雰囲気を感じとることができた。

農業機械科の実習室を見学したが、機械が古く、日本では使用していないようなものが多く、このような機械の修理、部品の調達等、メンテナンスが心配ではなかろうか。

### (3) チェンマイ大学

広大な敷地で一つの町を思わせる大学で、協力隊員は理学部化学科に派遣されていた。

この化学科では、高分子化学、バイオテクノロジー、セラミックを中心とした教育を行ない、タイ国ではこの技術者の需要が多く、毎年引っぱりだこである。工夫をこらした実験器具の製作など、すぐには部品の調達ができないなか、頑張っておられる姿に感心した。

### (4) バンコク日本人学校

文部省の指導下で、海外教育施設としてタイ国に居住する日本人子女に、日本国内に準ずる教育が行なわれ、日、タイ両国の友好関係と、タイ政府の日本国民に対する理解を前提に認可された学校である。歴史が古く、全国から派遣された先生方が教育課程に基づき熱心に指導されている姿がうかがえた。幾多の試練（言葉、タイ国教員免許取得等）を乗り越えて頑張っておられる。しかも生徒数1300名と多く、いかに日本から派遣されている企業戦士等が多いかをあらためて実感させられ、国際化教育の必要性を授業のなかに取り入れなければならぬと思いました。

気になることとして異国での長期にわたる生活と、義務教育終了後の日本での高校進学問題は、生徒、先生とも不安であろうと思われた。

### (5) タイ東芝

タイ政府の自国産業育成の一環で、日・タイ合併企業として1969年設立。輸出基地型産業として各国へ輸出できるようにしたい意向である。従業員1200名、製品の大半はタイ国内向けであるが、テレビ、炊飯器、扇風機、冷蔵庫、モーター等手先の器用さを生かし日本製品と同様であり、安い生産コストは驚く程で、日本よりの指導者7名ということで、技術移転が着々と進められていることを膚で感じとることができた。

このような低コスト製品が日本へ輸出されたなら、日本の人件費の高騰によるコスト高製品は、たち打ちできぬのではないかと心配である。



## 5. わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきと考えるか

JICAタイ事務所にて、社会、経済状況等について説明がなされ、タイ国に対し我が国から多くの援助、協力が行なわれていることを知った。

国王主導の政治のなかで、日本に対し友好的で、工業を興し技術移転を積極的に進めて欲しい。そのためには、日本企業投資を歓迎し、現在700社以上が進出しているとのことで、外貨獲得の国策推進中である。

政策の手助けのためJICAを通じて、多くの専門家、調査団、青年協力隊員派遣、機材供与等々多くの協力がなされている。

タイ農業に対するプロジェクトの紹介、特に先端技術導入、協同組合振興計画、造林研究訓練計画など、また、工業化が進むなかでの工業開発振興など、タイ国が進んだ技術を習得し、国際競争力のついた国に生長した時、日本の立場はどうあるべきか等を広く紹介していただきたい。

## 6. 今後の教育指導に生かす具体的方策あるいは教材として考えていること

私は、農業教育にたずさわる立場から、農業、あるいは都市計画、緑化事業、観光地周辺整備等に関心を持ち視察してきた。農業の現状と展望、都市計画による道路、交通事情、公園、街路樹の整備状況など種々の角度から見たことを、写真、スライド作成し、今後の教育活動のなかで生かしていきたいと思う。

東南アジアの要衝として発展するであろうバンコク、同じアジアの仲間の姿を生徒に紹介したい。

## 7. 所感および意見

今回のタイ研修において、予備知識もあまりないまま、参加させていただきましたが、多くのことを学ぶことができました。

農業国タイから工業国へ変革しようとする姿がみられ活気が感じられた。外国を見る機会のなかった私にとって新鮮であり、バンコク市内の車の多さには、途上国のイメージを一新させられました。

急速に進む近代化のなかで、大気汚染、道路、給排水設備住宅、等環境問題の早急な改善対策の必要性を強く感じました。

また、仏教文化を中心とした寺院や、遺跡を見学することにより、王国の繁栄した昔をしのぶことができ、今後観光地として有望であると思われました。

国際競争力をつけつつあるタイが、先進国に追いつこうとしている姿、さらに日本からの援助に

よる多くの専門家、協力隊員の活躍されている所を見る機会ができ、国際理解の重要性を考えることができました。

開発途上国に対する援助が円滑に活用されていないというような問題も指摘されているようだが、各関係機関と連携を密にし、効率のよい協力ができるよう願っています。

この研修で得たことを参考にし、農業教育の場で少しでも生徒に還元できたらと思います。

最後に、このような研修の機会を与えて下さいました国際協力事業団に深く感謝致しますとともに、今後益々のご発展を祈念致します。

氏名 奥 正 弘  
所属学校 宮城県立都城商業高等学校  
担当教科 社会科

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) タイ国の政治、経済及び国民生活の現状
- (2) タイ国における日本国の援助について
- (3) 青年海外協力隊員の現状と問題点について

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

- イ. 多額の国際協力資金が援助されているが、世界には、まだ多くの援助を必要としている国、人々がいる。
- ロ. タイ国では、各種の経済、技術援助がおこなわれているが、タイ人が懸命に学び、努力している姿はすばらしい。
- ハ. 日本の経済、技術援助がタイ国経済発展に一定の役割をはたしている。

### (2) 気になったこと

「建物、ダム、港などの施設やさまざまな経済、技術援助は、進んでいるようだが、タイ人の心をつかんでいるかというとうまく行っていない」と多くの人が言っていた。

我々がタイに行く前、NHKでタイのえび養殖の分野に日本企業がのり出し、タイのえび養殖業者と対立、という報道があったが、日本人がタイ人の心をつかむことのできない原因があるように思う。

どうすれば、アジアの人々と共に生活していくことができるか。その場合、経済、技術協力はどうあるべきか。また、私企業はどうあるべきか考えたいものです。

青年海外協力隊員は、世界に800名近く、タイ国に30名少し活動しているようですが、彼らの活動が「ありがたい」と受け入れられる環境を作ってもらいたい。場合によっては、彼らの活動が、日本企業のもうけ本位の活動と行動で批判を受け、“無”になっている。

また、協力隊員が日本へ帰った場合のフォローが充分でないようだ。

### 3. 所感および意見

#### (1) 研修時期及び期間

7月末から8月初めにしてほしい。

#### (2) 研修日程、及び訪問先

JICAの事務所もある所ですから、もう少し、訪問先なども検討してほしい。

#### (3) その他全般的なこと

全体として、大変すばらしい研修でした。また、多額の金額を援助し、参加させていただいたことを感謝しています。

JICAについても、新聞で報道される程度の知識しかありませんでしたが、JICAの職員及び、青年海外協力隊員及び退職後、シルバー人材として活動している人に接し、「夢があり、フロンティア・スピリットがある」と感心し、自分の日常生活に計画し、開拓していく新鮮さが不足してきていることを痛感させられました。

今後も新鮮な気持でタイを見、生徒に接しつつ、JICAのことも考えていきたいと思っています。

氏名 永田良文  
所属学校 鹿児島県立鹿屋農業高校  
担当教科 農業

平成元年8月24日から30日までの7日間、国際協力事業団の協力、援助により、高校教師海外研修派遣団としてタイ国を訪問致しました。

タイ国とはどのような国なのか、国際協力事業団の果たす役割はどのようなものか、非常に観光気分も加わりながら、興味深く参加させていただきました。

まず主な研修日程及び、内容は次の通りでした。

- 8/24(木) 成田発 ～ バンコク着
- 25(金) カセサート大学研究協力視察、JICA事務所
- 26(土) バンコク市内見学(アユクヤ遺跡見学)
- 27(日) 移動日、チェンマイ着、協力隊員との懇談会
- 28(月) メジョー農科大学、チェンマイ大学
- 29(火) 日本人学校視察、タイ東芝
- 30(水) バンコク発 ～ 成田着

当初の日程より交通事情により、1～2ヶ所消化出来なかったが、上記の通り、無事、研修できました。特にこの機会に、国際協力事業団の概要を知ることができましたことが、何より大きな収穫でもありました。

空路6時間、ようやくバンコク空港に着いた。さすが国際空港、立派な空港であった。しかも、アジアはもちろん、いろいろな人種が目につき、タイ国へ着いた実感が強くわいた。宿舎までバスで2時間、広い道中の道路を、速度制限があるのだろうかと思わせる位、猛スピードで走る。途中から、近代的な高層ビルが立ち並び、やがて車は日本の都会並みに混雑してきた。10年から～20年前の日本車と単車が目立つ。よくも交通事故が起こらないものだと感じる。こんな印象を受けながら、翌日の研修に胸を走らせた。

#### (1) カセサート大学視察

バンコク市中心より約80km西北の所、ナコンパトム県カンペンセンに、タイ国農業教育最高機関であるカセサート大学総合研究センター及び、農業機械センターを視察した。広大な平地の土地に壁がなく、いかにも、地域に開かれた大学という感じがした。最初、科長から大学の説明を受けたあと、施設を案内してもらった。主に、サトウキビ、パパイヤ、貯蔵に関する研究に

主力を置いて、研究されていた様に思えた。

日本との経済協力関係は無償、有償、専門家派遣などの援助を受け、次の様な農業開発プロジェクト研究がなされていた。

(ア) 作物改良の為の生物学と育種（総合研究センター）

(イ) 農業環境と品質保証技術（ ” ）

(ウ) 農業機械化技術の開発（農業機械センター）

特に稲作の収穫、脱こく、サトウキビの収穫に関する開発研究が印象に残った。

問題点として、日本より協力供与された施設、機械のメンテナンスに、多額のローカルコストと時間がかかるとのことだった。又、講義室には、タイ王国の写真がかかかってあり、いかにもいかにも王国の国という印象を受けた。視聴覚機材も日本から援助されたことで立派な物が、整備されて大変喜んでおられた。

## (2) 国際協力事業団 タイ事務所

斉藤所長より、タイ国の政治、経済及び J I C A 事業概要の説明を受け、さらに J I C A が行なっている外国への協力援助の理解ができた。その主な概要を説明及び資料によって、ふり返ってみると、次のようであった。

タイ国事務所の設置は、以前は、日本大使館内においてあったが、現在では独立した事務所になっている。在留日本人 13,000 人、700 社以上が進出しているとのことだった。

## (3) 協力隊員との懇談会

チェンマイ市内で、4 人の協力隊員との夕食を囲みながらの懇談会でした。チェンマイ教員養成専門学校で、日本語を教えておられる竹村氏、三浦氏、チェンマイ大学で繊維化学を教えておられる柳井氏、メジャー農科大学で電子機器を教えておられる小暮氏の 4 名であった。4 名の方々は、真黒に日焼けした顔で元気そうだった。その体からあふれる雰囲気は、学生の中に、直接解け込み、学生が求めている技術、技能をおしみなく教え、与え、タイ国の経済、社会発展に寄与されている姿だった。現在タイ国には 39 名の隊員（男子 29 名、女子 10 名）が活躍されていて、現在までに 125 名が派遣されているとのことだった。

## (4) チェンマイ大学

協力隊員の柳井氏の研究室を見学させていただきました。研究内容は高分子化学、セラミック、バイオテクノロジーが主で、酵素関係、水質関係の研究が盛んであった。

#### (5) 日本人学校視察

泰日協会学校（バンコク日本人学校）を訪問した。生徒は夏休みで部活動の生徒だけであったが、学校長の有吉校長から歓迎を受ける。生徒数小・中学校1300名在籍し、日本人教師は、文部省から40名が3年任務で派遣されていた。特色としては、タイ国の私立学校として認められ、日本人の教育が実施されていた。心配されていたことは日本に帰ってからの教育とのことでした。

#### (6) タイ東芝

最後の訪問先である東芝を小林さんから説明を受けた。タイ国との合併会社でタイ国が51%で、日本東芝が49%出資している会社で、設立20年目の会社であった。現在は従業員1200名（日本人7名）扇風機、冷蔵庫などを生産し、一部は輸出しているとのことだった。

以上、主な研修先とその概要を思いのまま述べてきましたが、1週間という短い期間で、タイ国の実情を理解することは困難でしたが、今まで、タイ国について、何も知らなかった私にとっては、大きな収穫であった。

タイ国は農業国であることはまちがいないが、急速に近代化が進みつつあり、バンコクと地方との差がひどく、二つの国がある様に思えた。今後、ますます地方から若者がバンコクに集まり、建設ラッシュが盛んになり、輸出産業にも力が入っていくと思われませんが、あのタイ国民の勤勉性や、国全体から受ける躍動感は、必ず、豊かな国を建設するものと思われた。

この様な現在では、生活環境の違うなかで、タイ国の人々と共に悩み、考え、又、喜びながら、自分の力を精一杯発揮され、大活躍されている協力隊、関係者のほんの一端にふれることができたことに深い感銘を覚えました。

この体験は、今ここで具体的にどうといえませんが、今後の私の教師生活に大いに役立つことと思います。

最後に、直接タイ視察に同行し、お世話して下さった、木下、山田両氏、及び、広報課長、中川様に、深くお礼申し上げます、報告と致します。

氏名 永井 寛  
所属学校 東京都立武蔵丘高等学校  
担当教科 教頭

#### 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 国際理解教育の研究・実践にあたって、我が国の国際協力の現場を直接視察することにより、国際協力をより深く理解したい。
- (2) 国際協力事業団の現地での活動状況を実際に見聞することにより、ODAの現状に関してより深く理解したい。特に次の4点について
  - ア. 技術協力に参加活躍している専門家の現地での生活
  - イ. 援助施設・機材供与等プロジェクトの現況
  - ウ. 現地での評価
  - エ. JICA現地事務所・職員の機能とその状況
- (3) 青年海外協力隊の活動状況と隊員の現地生活
- (4) 海外で活躍している日本人の生活の問題点

#### 2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと
  - ア. 国内ではODAについて種々の暗い問題点をあげているが、今回の視察では、現地において高い評価を得ていることを実際に見聞できた。
  - イ. 機材供与等の有効な援助には、メンテナンス・技術指導・現地に見合った改造など「人」が伴う事が多い。今後きめの細かい実のある有効な援助を進めるには人材の育成が重要である。
  - ウ. 国際協力事業団の現地事務所は少数の人数で、多額・多岐にわたる援助を良く行っている。
  - エ. 外国での「人づくり・国づくり」は大変気苦勞の多い仕事であり、うまく行ってあたりまえ、失敗すると批判の多い事業である。
  - オ. タイ国の乳児死亡率が予想以上に低く、識字率が高い。



カ、海外で活躍している人は、我が国の国旗に対する見方、考え方が変わる。

キ、タイ国は、首都バンコックと地方の格差がいろんな意味で非常に大きい。またタイ国の経済成長率が高く、1人当りのGNPが比較的高額である。

## (2) 気になったこと

ア、現地で活躍している青年海外協力隊員の任期が大変ではあるが、2年間では効果があげにくく、短いのではないか。そのためには、期間中に現地を離れて研修、休養、健康診断をする期間を長く、場所を設定するなど期間などの制度を現地の実態に合わせてはと思った。

イ、国際協力事業団の現地事務所の職員数が少ないのではないか。現在の人員できまこまかい充実した援助が出来ないのではないか。機材供与のメンテナンス等各地に短期技術指導に派遣出来る技術センター、技術専門家をプールして置く制度が必要ではないかと思つた。

ウ、民間レベルでの経済協力の先兵として企業より派遣された方々の大きな悩みの一つに子どもの教育、特に高校進学があつた。

## 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

### (1) 青年海外協力隊員の活動

多くの青年がボランティア精神に支えられ、目的意識をもち、現地の人々と寝食を共にして、現地の人々を育てていく人づくり、技術指導こそ真の技術援助であり国際協力である。

### (2) カセサート大学の総合研究センター、農業機械センターなど

バンコクの西北の郊外に新しく拡充設置された大学の各センターの施設・設備の大部分は、一般無償資金の経済協力による。この施設はタイ国農業教育の最高機関であり、大学の施設・設備が援助で一新され、タイ国農業技術専門家の養成に欠くことのできない機関であり、タイ国の農業技術の進歩発展に寄与するものは非常に大きい。これに対する現地タイ国でも評価は非常に高いものである。

## 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

東南アジアの一つであるタイ国の現地を視察して、国際理解教育の良き教材を得た。また我が国の国際協力の実際の現場を見聞した経験から、学校教育の指導に直接あたっている教職員の指導

助言にあたりたい。さらに直接生徒指導等の場で次のように役立てたい。

- (1) 国際教育研究協議会の企画運営に反映させたい。
- (2) 東京都の国際教育研究協議会の研究会はじめ諸会合に今回の視察報告をし、さらに国際協力についての説明をしたい。
- (3) 東京都公立高等学校教頭研究会 第二委員会の研究テーマに「国際理解教育」をテーマにあげ、来年度（平成2年度）全国大会で発表する資料に活用したい。
- (4) 学校内外の教職員に対して、職員会、研究会等の諸会合の機会に海外研修の報告をし、国際理解教育、我が国の国際協力について啓蒙したい。
- (5) ホームルーム活動、クラブ活動など特別教育活動の指導にあたる教員に対して、今回の経験からの教材または資料等を提供したい。
- (6) 生徒集会等の講話の資料にしたい。特に青年海外協力隊員の活躍を。
- (7) PTA活動等を通して地域社会、父母に海外研修で見聞した国際協力の実際を伝えたい。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

夏季休業中であり参加し易いが、若干早目の方が二学期に余裕が取れる。また、1週間の期間であったが、往復に2日費やすので出来れば現地で正味一週間あれば、ゆとりと充実された研修になる。

### (2) 研修日程および訪問先

ア. 訪問先は各分野に分れ、しかも観光もあり良い計画であった。

イ. 団の組織・構成を考え担当を決め、研修内容、現地でのミーティングも必要ではないか。

### (3) その他全般的所感

高校教育の現場の教員に対する現地視察を企画された事に敬意を表わすと同時に感謝したい。この様な現地視察は、国際理解教育の推進に大いに役立つ事業であり、この様な有意義な研修の発展を期待したい。

今回引率されたJICAの木下、山田の両氏には研修中適切なお配慮、ご指導をたまり、またJICA現地事務所の職員にお世話になり感謝申し上げたい。